展望台から見る聖書

Seeing the Story of the Bible

Genesis
Exodus
Leviticus
Numbers
Deuteronomy
Joshua
Judges
Ruth
1 Samuel
2 Samuel
1 Kings
2 Kings
1 Chronicles
2 Chronicles
Ezra
Nehemiah
Esther
Job
Psalms
Proverbs
Ecclesiastes
Song of Solomon
Isaiah
Jeremiah
Lamentations
Ezekiel
Daniel
Hosea
Joel
Amos
Obadiah
Jonah
Micah
Nahum
Habakkuk
Zephaniah
Haggai
Zechariah
Malachi

Matthew
Mark
Luke
John
The Acts
Romans
1 Corinthians
2 Corinthians
Galatians
Ephesians
Philippians
Colossians
1 Thessalonians
2 Thessalonians
1 Timothy
2 Timothy
Titus
Philemon
Hebrews
James
1 Peter
2 Peter
1 John
2 John
3 John
Jude
Revelation

マイヤー・パールマン著

展望台から見る聖書

マイヤー・パールマン著

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

Seeing the Story of the Bible

by

Myer Pearlman

FSS

目次

はじめに……1
第一章　物語を見渡す……5
第二章　創世記の計画……20
第三章　国の誕生とその訓育……27
第四章　孤立と離散……48
第五章　イスラエル人の心情……59
第六章　イスラエルの伝道者……65
第七章　「トンネル」時代……76
第八章　あがないの顕現……83
第九章　福音広められる……96
第一〇章　あがないの真理の説明……105
第一一章　計画の完成……110
自習案内……121

展望台から見る聖書

展望台から見る聖書

はじめに

ある人がニューヨークへ出て来た。

そうして、この大都会の様子をよく知りたいものだと思った。あの道この通りと自動車を走らせて、目につく公共建造物にはいってみたり、大きな公園をひとまわりしたり、力の限りを尽くしてニューヨークのすべてを捕えようとした。歩きまわることは楽しかった。しかしその人はどうもこれでいいという気がしなかった。ニューヨークは大きく、時間は限られていた。こんなことでは、結局、ニューヨークを**全部**見ないで帰ることになりそうであった。

そこへ、ある日、友だちがやって来た。そうして飛行機でも使ってみたらどうだと言ってくれた。二人はさっそく飛行場へと急いだ。離陸すると、ニューヨークはずっと目の下に広がった。友だちは案内役を買って出た。旧市内と新地域、都市計画のあらまし、市の大切な部分など、あちらこちらと指さしながら教えた。一回りして飛行場へ帰るまでに、友だちは主な建物、道路、公園、波止場、そのほか知っておいていいようなところを拾いあげて説明してくれた。おかげで、こんどはよくわかった。その人はニューヨークを**全体**として見たのであった。そうして、その大

きさ、つくりの構え、美しさをはっきりと頭に植えつけられ、後に帰郷してから会う人毎にニューヨークの印象を語ることができたのである。

クリスチャンは聖書に親しんでいるものの、多くはただずっと見物しながら通って行くだけだと言ってもよい。その読み方は、ある時、ある書巻の、ある章の、ある節を、ここを少し、あそこを少しというように読むのである。そして、聖書を一つの計画のもとに仕上げられた一冊の大きな書物として見ていない。そこで、ここでは今までとは違った方法で読んでみることにしよう。まず、わたくしたちは非常に高いあるところに立っていることにする。そうして、聖書六十六巻をその内容と共に一目に見おろすのである。展望台から見る全景である。すると、そこには、旧約聖書と新約聖書という二つの大きな区分があり、そのお互いの間には関係のあることに気がつく。この旧新約両聖書のうちに神の御計画がどう進められているかということを、各書巻を一つずつ調べる代わりに大切な部分をあちらこちら抜き出して研究し、細かな点に力を入れる代わりに大きくつかんでいくというやり方で考えるのである。

サタンがイエスを試み、この世のすべての国々とその栄華とによって、イエスをそのわなに陥れようとしたとき、サタンはイエスを高い山に連れて行って一目でその全景を展望させた。黙示録のヨハネが、輝く美しさに満ち、完全につり合いのとれた新しいエルサレムの幻を見、この世のすべての国々とその新しいエルサレムとの関係を見るためには、み霊に感じて大きな山に連れ

られて行かなければならなかった。これにならって、「展望台」から眺めて聖書を学ぶことは、より深く聖書の美しさを味わう上にも、より良く神の目的を理解する上にも、助けとなるに違いない。

第一章　物語を見渡す

深い考えもなく読めば、聖書はおおよそ千六百年間にわたって書かれた六十六巻の書物を寄せ集めたもので、その著者は約四十人、そのうちには王あり、預言者あり、祭司あり、牧者あり、漁師ありというようなことになる。こうみれば、聖書は一冊の書物というよりも大図書である。一通り読んでも、これというはっきりした主題はつかめない。旧約、新約両聖書を一つに貫く統一調和が表面に出てこないからである。何だか、歴史、詩歌、教訓、系図、律法、預言、教理、伝記などの混じり合ったものという感が深い。したがって、聖書から受ける印象は、色の違った多くの布をつぎはぎした着物という感じであって、縫い目なしに織り合わされた衣装ということではない。

しかし、幾度も繰り返して読み、注意深く調べ、深く掘りさげ、そこにある統一調和の力を見るならば、聖書には沢山の物語、色合いの違ったいろいろの話の底を流れる立派な筋、すなわち、**神によって定められた救い主を通しての人間のあがない**、という一つのはっきりした主題のあることがわかる。そうして、また、聖書は人間の手で書かれたものであるが、その人たちは皆、聖霊という一人の大著述家の導きの下にあったのである。（第一図参照）

これがわたしたちの聖書の、ほかの宗教の聖典とは非常に違う点である。聖書は旧約の最初の

巻から新約の最後の巻まですばらしいテーマで貫かれている。そのプランの立て方も、全体を通じて、前に出たものと後に出るものとがしっくりしないというようなあやふやなものではない。マホメット教のコーランなどとは全然違う。コーランは何の関係もない百十四の章をただその長さにしたがって並べ、集めたものにすぎない。しかし、聖書は、これに親しむにつれて、各書各章の間にお互いに結びつき合った統一調和のあること、その統一調和は決してあれこれと編み合せ、つなぎ合わせたような人工的なものではなく、歴史というものを組み立てるものの部分、要素として、歴史そのもののうちに深く根をおろしているものであることを強く感じさせられるようになる。歴史と聖書との関係は紙幣とすかしのようなものであって、歴史そのものがだめになってしまわないかぎり、聖書を消し去ることはできないのである。

この統一調和を生み出す物語はなかなか劇的である。キリスト教の勝利とその影響という問題について、ユダヤ教のラビの一人がある宣教師に「君は宗教をひどく芝居じみたものにしてしまう」と言ったが、この言葉からもその劇的なことがわかる。

人類のあがないは道徳や哲学の冷やかな形式主義ではどうすることもできない。こと細かに計算して組み立てた学者の理屈からは出てこない。あがないの土台は一つの物語のうちにあるのであるが、それは心にしみついて離れない物語であって、あがないにかけてはこれまで一度も失敗したこともなければ、これから先も決して失敗することのない物語である。その物語が人の心を

律　歴　詩　預　伝　系　教　教　讃

創世記—人—間—の—あ—が—な—い—黙示録

法　史　歌　言　記　図　理　訓　美

第一図　いろいろなものの統一調和

かき立てて高らかな感動へと導くのである。その筋はだれでも知っている。一番初めに、天地万物の悪党の首サタンによって、人が創造主から引き離される。サタンはしつこく神と人との間に不和を作り出そうと構えていたのである。ところがこのサタンは人類の偉大な友、イエス・キリストに打ち破られる。そうして、イエスのたぐいない犠牲を通して人類は救われる。終わりに、強敵サタンが滅ぼされて人間が再びすたれることのない新しいエデンの園で、神との永遠の和らぎにはいるありさまを、目に見るように描き出している。

あがないの計画はこの本当の話の中にある。それは心を満足させるばかりでなく、頭でもうなずける話である。

素直な魂はいつの時代にも「神さまの**話**をして！」と叫んでいる。学問を深くした人はいつの時代にも、「神の**真理**を与えよ」と言っている。聖書はここに一つの**本当の話**、キリストを通してのあがないの物語を持ち出して、素直な魂の叫びにも、学問をした人の求めにも応じているのである。

これは、初めから終わりまで、書いた人たちが何のために書くのか、細かな点がどうなっているのか知らずに書きあげた物語である（ダニ一二・八、九、ペテI一・一〇、一一、マタ一三・一七）。大著述家――聖霊はこの物語を書くのにいろいろな人の手を借りて、いろいろなところを分担させた。しかし、だれにもその構想の全体は知らせなかったのである。また、この劇には大勢の演

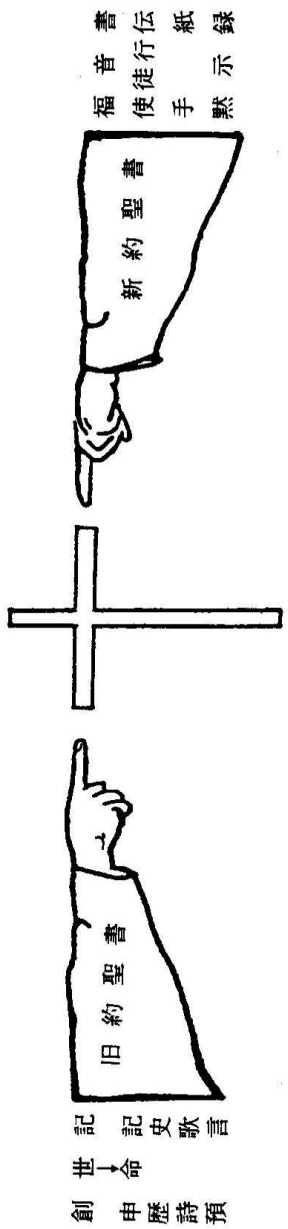
技者が出るが、その演技者たちはその劇の中でどんな役割をしているのか、その役が良くても悪くてもそれはすでにその構想のうちに織り込まれていたものであったことを知らなかった（使徒二・二三、三・一七、一八）。パロ、ネブカデネザル、ユダ、ピラト、そのほかこの劇のあらゆる場面で大きな役を務めている人たちも、実はそんなことには気がつかなかったのである。舞台裏にいる大著述家の指図にしたがって、ただ動いただけなのである。

あがないの計画は表面失敗したように見えても、それで敗退してしまうようなものではない。「それは、悲惨な苦しみと一見敗北と見える深みのうちに、一番はっきりと、一番大きく、一番清く、一番崇高に押し出されている。人間の目には神のみ国が絶望のどん底につき落されたかと見えたときに、預言者たちにおけるように、勝利の確信が現われたのである。」――オアー。

「……聖書全体にわたり、御自身について……」（ルカ二四・二七）

あがないの物語はキリストを中心とし、その十字架があがないの象徴となっている。聖書全体がさし示しているものは生きたキリストであり、多くの物語、色合の違ったいろいろの事がらに統一調和を与えるものはそのキリストである。（第二図参照）

くず鉄の山はそのままでは何の統一調和も一致もない。鉄くずは一つ一ついろいろな形、いろいろな大きさ、いろいろな色をして雑然と積み重ねられたままである。ところが、その山の下に



第二図　聖書全体の中心はキリストである

電磁石が入れられ、電気が通じると、たちまち、一つの心、一つの目的を持つもののように動き出す。みんな磁極に飛びついてそこで一つになる。――つまり、その共通の中心に向かって集まっていくのである。同じように、あがない主は大きな霊的磁石であった。このあがない主が現われたとたん、聖書全体は、律法を書いたものも、歴史を扱ったものも、詩歌を集めたものも、そのほかの事を配したものも、皆その統合の中心である、あがない主のもとに引きつけられたのである(ルカ二四・二七、使徒一〇・四三)。それゆえ、ヨハネ一二・三二の言葉を借りて、主のみ言葉を「そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての聖書をわたしのところに引きよせるであろう」というふうに考えてみることもできると思う。

旧約、新約両聖書は一つの物語である

ざっと読むと、聖書は旧約と新約との二部に分かれていて、その間にはほとんど何の関係もないような気がする。旧約と新約とはいろいろの点で違っている。たとえば、人の行動の標準になるものなどがそれである。しかし、よく調べてみると、そこには統一調和の力があって、実は一冊の書物であることがわかる。ヨーロッパとアメリカとは大西洋で分かたれている。しかし、海の下ではつながっていて、この両大陸は一つの大きな大陸となっている。聖書もそれと同様である。神の摂理がいろいろの形で人に働いていることや、黙示が少しずつ明らかにされていくこと

や、風習の違いその他によって、表面にはさまざまな相違が起こったが、その相違の下にはこれを一つに結んで一つのものにする糸のあることがわかる。その統合に働く力は、あがない主を通して行なわれる神のあがないに置かれているのである。

旧約聖書と新約聖書との関係は、旧約に記されていることが新約で成就されているということである。旧約が新約によって完成されるのは丁度植物が花によって完成されるのと同様である。花が植物のほかの部分からはぐくまれて出てくるように、新約は旧約からはぐくまれて出てくるのである。(第三図参照)

花が咲くまで植物は**未来**を望んでいる。それが**約束**の花となって現われる。旧約聖書では、あがないは未来に現われるべき大きな約束である。花を作りあげるために必要なものは全部種の中にあって、それが茎となり芽となっていくように、福音はそれが宣べ伝えられる前から旧約聖書の中にあったのである。パウロはその旧約の種の中のものを見つけた。彼が福音説教のよりどころとした聖書は旧約だったのである。その上に、恵みの基本教理を打ち立てたのである(ロマ三・二一、二二)。パウロは、自分の述べる福音は特に新奇なものではない、ただ律法にあり預言者たちの語ったことをもとにするメッセージにすぎない、と言っている(使徒二六・二二、二三)。そうして、また、ヘブル人への手紙は福音の大要と特色とは旧約聖書のうちにあるということを、大きく示し掲げている。

第三図　新約聖書は旧約聖書の花である

芽はいつまでも芽ではない。移り変わっていく。しかし、それは滅んでしまうのではない。かえって、花として完成された形で現われる。芽はそれが花としてすっかり開いたときに、その目的を達する。旧約聖書は新約聖書とキリストのうちにその完成がある。不完全な、一時的の、仮りのものは皆消え去り、永続性のある大切なものだけがそこに残された。旧約聖書は移り過ぎたのであって、特にそのうちでもその書名を表わす契約は過去のものとなったのである（ヘブ八・七―一三）。しかし、こうは言っても、それがキリストによって崩されたと考えるのは正しくない。また、過去のものになったからというので、無関心であったり、おろそかにしたり、軽くみたりすることもよくない（マタ五・一七、一八）。

植物はつぼみが開き、その美しさを賞し、その香りを楽しむ時のくるまではその用を充分果たしているのではない。旧約聖書のあがないの諸真理も、しばらくの間、神の御計画の中心、その真理の荷ない手であるイスラエルという一つの民族のうちに閉じ込められていたのである（マタ一〇・六、一五・二四、ロマ九・四、五）。しかし、旧約聖書がキリストによって全うされた時、旧約聖書に預言され予表されていたあがないの真理の香りと美しさとは全世界のものとなった。そうして「欲する者」はだれでもこれを受けて喜ぶことができるようになったのである。それは、この約束の満たし主、イエスの最後のご命令に「**全世界に**出て行って、**すべての造られたものに**福音を宣べ伝えよ」とあるからである。

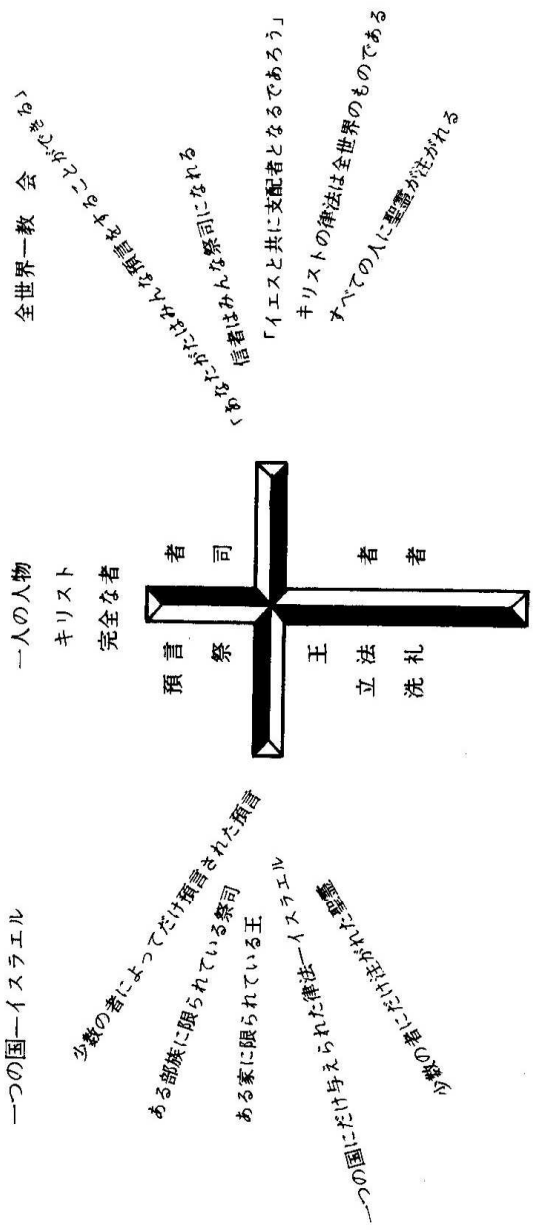
ここで、もう一度、旧約、新約両聖書を比べてみよう。

旧約聖書	**新約聖書**
あがないが約束され、予表される。	あがないが全うされる。
動物が沢山犠牲にされるが、罪はどこまでも取り去られない。	一つの犠牲が供えられ、それが永遠の完全なあがないとなる。
人間の、不完全な祭司が大勢いる。	神の、完全な祭司が一人いる。
新しい契約が約束される。	変わることのない契約が新しく結ばれる。
神の来たるべき国が予表される。	神の国は近づいている。
神の王、救い主が型や預言で約束される。	救い主・王・イエスの降誕、伝道、死、復活が行われる。

キリストはどのようにして聖書を全うされたか

旧約聖書から新約聖書へと読み進めていくと、あがないの真理はイスラエルという**一つの民族**を通して人間に手をさしのべていることがわかる。また、その真理は、キリストという**一人の人物**によって、それぞれ旧約聖書の外包み（儀式、ひな型等）を破られ、裸にされて、全うされている。そうして、キリストは教会によってこの恵みを**全世界**に送るのである。（第四図参照）

第四図　聖書はどのようにして全うされているか



このことが、どのように進められていったかということを少し詳しく考えてみよう。

旧約時代には、預言をする者はその数が極く少なくて、来たるべき救い主についての最高の預言のメッセージを語ることは特権とされていた。そこへ主が預言者として、決定的で完全な神のメッセージを人間に持って来てくださった(申一八・一八、一九、ヘブ一・一、二)。救い主がそのみわざをなしとげられたことに関する預言またはあかしをする特権は、今ではすべての人に与えられている。コリントⅠ一四・三一に、「あなたがたは、……ひとりずつ**残らず**預言することができる」とある通りである。

祭司となることのできたのは、旧約では、レビの一部族と限られていた。キリストはみずからを犠牲としてささげ、偉大な祭司となられた。この大祭司はいつまでも生きていて、とりなしをしておられる。そこで今では、キリストを信ずる者はだれでも、その国籍や身分などに関係なく、そのからだを奉仕のために生きた供え物とし、神のみ前に霊的犠牲をささげるならば、それは昔の祭司と同じことをしていると言われるのである(ロマ一二・一、ペテⅠ二・五)。

旧約時代には、神に選ばれた王がダビデという一つの家系から出た(詩一三二・一一、一二)。肉によればイエスはダビデの子孫から生まれたが、彼こそ永遠の王・欠けるところのない王で、ダビデはただのひな型に過ぎなかった(ロマ一・三、ルカ一・三二、三三)。そうして、この大いなる王は「欲する者」には王と共に支配する誉れを与えられ(テモⅡ二・一二)、王がその国を全

くみ手に収められる間は（黙二〇・六）、王と共に王の座につかせてくださる（黙三・二一）。神がこう申し出られるのは「勝利を得る者」に対してである。

旧約時代に聖霊を受けた者はおのずと限られていた。それは預言者、祭司、王、士師、その他官職にある者たちにであった。イエスが来られた時、聖霊はその上に下って**とどまった**（ヨハ一・三三）。

そうして、聖霊は限りなくイエスに注がれ（ヨハ三・三四）、イエスは絶えず油注ぎを受けて神に仕えられたのである（使徒一〇・三八）。このキリスト、この完全に油注がれた方が「欲する者に」聖霊のバプテスマを与えられるのである。この油注ぎに関しては、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、男も女もないのである。使徒行伝二・三九に「この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」と記されている。

旧約の律法はイスラエル一国に与えられ、イスラエルはそれを極端な独占欲で守っていた。立法者として非の打ちどころのないイエスはこの律法に対して正しい解釈を行ない、霊的な意味を与え（マタ五―七章）、死んで復活し、そうして、すべての人がこの律法を守れるようにして下さった。復活された後イエスはその律法を、**すべての国民**に与えよと命じられた（マタ二八・一九、二〇、ヨハ一三・三四、ガラ六・二）。

こうしてキリストは聖書を成就された。旧約聖書の恵みはすべて、昔は一国、一民族、一家族に限られ、さもなければ、特に恵まれた一人物に与えられていた。しかし、今は、大いなるこの成就者の働きによって「欲する者」はだれでもこれを受けることができるようになった。イエスは古くから伝わる無限の宝庫の配給係となり、そのみ手を広げて、心を貧しくしてまことの富を求める者を、ことごとく富ましめられたのである。

第二章　創世記の計画

聖書には人間のあがないという、はっきりとしたテーマのあることはすでにわかった。そこで、今度は旧新約両聖書を通して、このテーマを調べてみることにする。神の選ばれた民、イスラエルは変化に富んだ歴史をもつ国であるが、その歴史を通して、いかに多くの人物を用い、いろいろな方法を取って、神の大いなる目的が達成されたかを注意してみるのである。そこには背信がある。人間的な失敗がある。この上ないきびしい審判もある。しかし、神はその目的達成のためには、御計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益としてくださったのである。

この御計画は創世記のうちに知ることができる。

(一)　発　端　　あがない劇の舞台はどのようにして作られ、あがないを受ける者にはどのような者がなるのか。

(二)　堕　落　　人間があがないを必要とするようになった筋道。

(三)　新　生　　神はどのようにして一人を選び、一家族を選び、一国を選び、これを通してあがないを全うされるのか。

創世記には沢山の物語が出ている。しかし、これをまとめると、次のようなものになる。

天地創造についてであるが、これを読むと、**神はどのようにあれというみ心で**人を造られたかということがわかる。御自身にかたどって人間を造られた神は、人間は絶対に神にそむくことなく、神に従って歩み、神の与えられた力で世界を支配するようにというお考えであったのである。

堕落については、**人間はどのようにして今のようなものになったのか**ということがわかる。人間は自分の意思で勝手なことをしてサタンに負け、自分にも子孫にも、罪と死との報いを受けたのである。

のろいの暗やみにさし込んでくる一筋の希望の光、**あがない**の約束。

創世記三・一五にある

「わたしは恨みをおく、
おまえと女とのあいだに、
おまえのすえと女のすえとの間に。
彼はおまえのかしらを砕き、
おまえは彼のかかとを砕くであろう」

というあがないの約束は、人間と、これを堕落させる力との争いの絶えないこと、苦しみを通して人間が勝利することの預言である。そうして、この約束は人類の代表者、**人の子**を通して全う

された。人の子は良い働きをしながら、また、悪魔に押さえつけられている人々をことごとくいやしながら巡回し、御自分のあがないと苦しみと死により、悪魔に打ち勝ったのである（ヨハⅠ三・八）。

アダムの子**セツ**が、後にあがない主が来られる血筋に選ばれた。エバはそれを知っていたので、創世記四・二五で「神はアベルの代りに、ひとりの子をわたしに授けられました」と言っている。

この時から、神を敬うセツの種族と神を恐れないカインの種族とが大きく頭をもちあげてくる。時がたつにつれて、初めははっきりとしていたセツ族とカイン族との区別が消えていって、ついに人類は堕落のただ中に押し流されるようになり、それが洪水を招きよせる。そうして、セツの子孫の**ノア**が後に世界をあがないへと導く管になる人として選ばれる。

洪水の後、ノアの子、セム、ハム、ヤペテの三人によって、民は全地に広がった。三人のうち、**セム**が選ばれて、後に神が特別なやり方で神御自身を示現される人種の父とされた（創九・二六）。

ここまでを創世記の**前置き**と考えるのであるが、これはまた、聖書全体の前置きでもある。この前置きは第一章から第一一章までであるが、それは**人類**史のうち、世界救済の必要がどのようにして起こされたかということを示しているのである。これに引き続いて、選ばれた人に対する神の御取り扱いが記され、やがて、そのみ手が選ばれた家族へ、選ばれた国家へと伸ばされていくことが書かれている。ある意味では、聖書の歴史は、事実上、ヘブル人の父、**アブラハム**から

始まっているとも言える。パウロはガラテヤ三・八に「聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることをあらかじめ知って、アブラハムに、『あなたによって、すべての国民は祝福されるであろう』との良い知らせを、予告したのである」と書いて、福音を最初に説き聞かせられたのはアブラハムであるとしている。新約聖書を書いた人たちにとっては、これこそ**その**約束であって（使徒一三・二三、三三）、新約聖書はその約束を説き明かしているということになるのである。

この約束はまた、聖霊が異邦人の上にも注がれるということにも関係がある（ガラ三・一四、使徒一〇・四五、一五・八、九）。**この**約束は、マタイ二八・一九、二〇、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」また、使徒行伝一・八「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」に先立つ約束であり、実に、使徒行伝はこの約束の一大完成に当たるのである。この約束はその成就が今日この時代にも、十字架を宣べ伝える人々の手によって、日毎に押し進められている約束である。「**地のすべてのやからは、あなたによって祝福される**」のである。

アブラハムにはむすこが二人あった。**イサク**は神の約束の子であったが、これが選ばれて約束

が回復された。

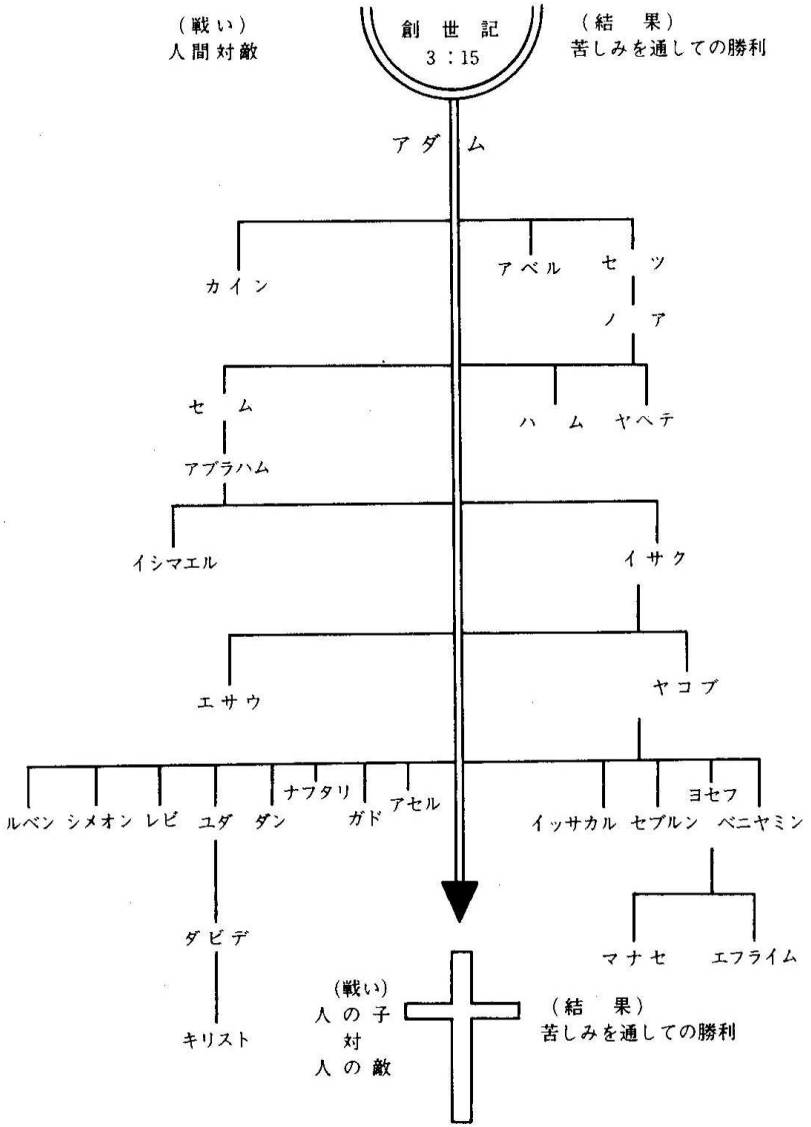
イサクには息子が二人あった。その一人、**ヤコブ**は選ばれて神と組み打ちをした。このヤコブに息子が十二人あった。それが後に**イスラエル**の十二部族の祖となるのである。

この十二部族のうちから**ユダ**の部族が大いなる支配者、国を治める者として選ばれる(創四九・一〇)。

人の名を沢山あげてきたが、この計画を成し遂げるためには、創世記ではないほかのところに、忘れてならない二人の人物がいるのである。一人はこのユダの部族から出たダビデで、彼は自分の王座にやがて救い主なる王がつかれるだろうとの約束を受けたのである。(サム下七、詩七二・を読むこと)もう一人はこのダビデの家系から出た**イエス**であるが、イエスについては、ダビデの王座を与えられ、とこしえにヤコブの家を支配し、その民をもろもろの罪から救うと言われている(ルカ一・三二、三三、マタ一・二一)。

次に第五図を掲げる。矢印はあがないに至る道筋を示す。それは創世記三・一五の、あがないに対する最初の約束に始まり、キリストによる完成に終わる。

たとえば、ある伝道師がある国を訪ねるという約束をしたとする。すると、そこには途中の旅路というものがはさまってきて、その伝道者がその国に着くまでには、いろいろの乗り物を使っていろいろな所を通り、旅行にはつきもののいろいろな体験をなめなければならない。あがない



第五図　創世記の計画

の約束とキリストの来られる時までの間には、これと同じことがあったのである。図にある人名は約束の満たされるまでに用いられた器であり、これらの人々を中心に数々の事件や体験が記されているのである。

第三章　国の誕生とその訓育

（出エジプト記から申命記まで）

創世記は、ききんのためにカナンを捨ててエジプトに去った、選ばれた家族の子孫のことを書いて、それで終わっている。ここで注意しなければならないことは、悲しくも美しいヨセフの話は読者を喜ばせるために書かれたのではないということである。また、主としてそこに含まれている道徳教育をするために書かれたものでもない。ヨセフはただ神のあがないの御計画の中でその役割を果たしているだけであり、ヨセフは選ばれた国の先祖となる、選ばれた家を守るために、ききんに先立ってエジプトにはいったのだと言っているのである（創四五・七、五〇・二〇）。

生みの苦しみ

イスラエルの民はエジプトで奴隷として辛いひどい目に会ったが、それは神の御計画の失敗ではなかった。むしろ、それはしなければならないことであった。ここでひとつ、そのひどい辛い経験が、イスラエルの国を、その大いなる使命につかせるためにどのように鍛えていったかということを考えてみることにしよう。

苦しみの火はこの国を本当の一致団結に融け込ませた。国民全体が共通の一つ経験に立ったからである。歴史を見ると、イスラエルはそもそもの初めから今日に至るまでいろいろの苦難を受け続けているが、その結果はいつもこのようなものであった。つい五、六年前も、アメリカのある一流会社の社長がユダヤ人に対して攻撃の火の手をあげた。その会社のユダヤ系技師たちが異邦人社会に何かをたくらんでいると訴え出たのである。ユダヤ人排斥の声はいつでも聞かれる。反セム族運動の期間中には、ユダヤ教の会堂の会員や出席数及びユダヤ人の友愛機関の会員数は、反対運動のない時よりも、はるかに多くなったのである。ユダヤ人排斥といっても、実はその本当の相手はユダヤ資本の力なのであるが、その陰には、先にも言ったような、ユダヤ人の国民としての一致団結がある。「一人のユダヤ人の顔をなぐりつけると、ユダヤ国民全体の鼻から血が流れ出す」と云った人があるが、それはその団結ぶりを語って余りある。

苦しみはこの国をほかの国から切り離し、どこまでも混じり合わないものとした。もしイスラエル人がエジプトで栄えるようなことにでもなっていたならば、先祖の地・カナンを愛させようとしても、到底できないことであったに違いない。特に、エジプトを出て長い旅路につき、身のすくむような危険に直面し、恐ろしい困難に巻き込まれたことを思うと、そう考えないではいられない。イスラエルの民にとっては、いろいろの困難、苦しみを通り抜けてその国にはいるのが一番良かったのである。

イスラエルの人々は、今の時代に罪の自覚を持った人々が体験するのと同じような体験を、それらの経験を通して味わった。そして、自分たちが救われなくてはならないこと、そのためには、すでにイスラエルを救おうと備えておられた神に願うよりほかにない、ということを知らされたのである（出二一・二三―二五）。ある学者が指摘した通り、よく考えてみるならば、ここに一つの目的のあったことがはっきりとわかってくる。すなわちエジプトでの労役は、エジプト人のもつ偶像礼拝に陥り、堕落し、神との間に取り交わした先祖たちの契約を忘れたイスラエルの人々に対する審判であったのである（ヨシ二四・一四、エゼ二三・三）。

それは神の新しい啓示を受けるための準備であった。イスラエルの人々は**主なる神をその救い主**としなければならなかったのである。時移り世変わって、イスラエル人が異邦人に圧迫されるようになったとき、力強くさしのべられた主のみ手によって、エジプトから救い出されたことが神のみ力をはかる物差しのようなものとなった。

イスラエルに課せられた労役は、後に、イスラエル文化の上に貢献することになる。それはイスラエルという国を実地を通して教育した時代であり、働く習慣や、物を造る仕方を教え込む時代であった。イスラエルがカナンにはいったとき、人々は芸術や産業に関する知識をもち、商売をし、人を雇うという能力を身につけていたのである。

仕えるために選ばれる

イスラエルはどういうわけで神の民として選ばれたのであろうか？

神から見れば、それは偏愛ではなかったのである。

――ここにある金持ちがいた。その金持ちがある時、ある山奥の村を訪ねた。するとそこに、人の情けを知らないひどい男に雇われて、朝から晩までうんうん言いながら働いている男の子が一人いることを知った。読み書きもできないこの野生のような山の子を知った金持ちは、心を強く引かれた。そうして、とうとう自分の養子にすることにしたのである。山の子は山の人たちから離され金持ちの家に連れて来られて、教育を施された。宗教のことも教えられた。道徳も仕込まれた。生活の実際面もいろいろとしつけられた。金持ちがこの子を選んだわけは、この子を訓育し仕立てあげた後には、また山へ帰して、そこの人々を教え、その人々を向上させようというところに目的があったのである。ここまで知れば、この金持ちがこの子を選んだのは山の人全体を愛したからであるということがわかる。その使命に対する準備がすっかりできたところで、山の人々の罪にあずかってはいけない、自分と同じ信仰をもっていない人と結婚してはいけないと警告してその子を山に送り帰した。

ところが、この山の子は、人を教え、人を導き、夜も昼も忙しいはずなのに、そうはしないで、

慢心をし自分のすぐれているところを鼻にかけ、他人を軽蔑するようになったのである。人々はその軽蔑に対して憎しみを報い、お互いの間には対立の壁が築かれた。金持ちはそのありさまを聞いて自分の子を送って注意を促した。すなわち、養子に向かって、自分ひとり偉そうな服装をしていないで、山の人の着るのと同じ質素なものを着るようにと、やさしく反省を求めたのである。しかし養子は誇りに目がくらんでいたので、父の言うことなどに耳をかさず、かえって、本当の子を殺して逃亡してしまった。

ここに書いたことは、もちろん、本当の話ではない。エジプトを脱出してからキリストを拒むまでのイスラエルの歴史を、ざっとたとえてみただけである。話のなかの金持ちはイスラエルの神である。養子はイスラエル、実子はキリストである。主はイスラエルを愛しておられた(申七・八)。それで、神はイスラエルを選び出し、ほかの国と混じらないようにし(申七・六)、その養子となし(出四・二二)国としての訓育を、その上に施されたのである。神がこの国を愛された目的はこの国がほかの国々に光を与え、高く引き上げるような国になるということだった(創一二・二、三)。

このようであったのに、イスラエルは傲慢になり、ひとりよがりに陥り、異邦人を見下して、その敵意を買うようになった。それをたしなめようとして神の本当のみ子がつかわされたとき、イスラエルはこれを拒んで、十字架にかけてしまった。その罪のためにイスラエルは世界の国々

をさ迷い歩く者とされたのである。

この物語のうち、この章では、特に、この若者が選ばれることについて考えていくことにしたい。見出しには「仕えるために選ばれる」と記しておいた。**イスラエルは仕えるために選ばれた**のである。イスラエルはすべての国の人々に仕えるためにほかの国々から分け離された祭司の国であった。わたしたちが火をおこそうとするときには、まず、ひとたばのそだ木から始める。それと同じように、全世界を神の真理の聖い火の炎で押し包もうとされたとき、神は一つの国から始めなければならなかったのである。この国の使命は世界に一つの本当の宗教を伝えるための導管となることであったから、神はこの国をいろいろに取り扱い、神の真理の専門家に仕立てられた。いかなる活動の分野においても効果をあげるためには専門家が必要なのである。ヨハネ四・二二の「救はユダヤ人から来る」というイエスのみ言葉も、ロマ九・四、五の「彼らはイスラエル人であって、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほむべきかな、アーメン」と、選ばれた民の特権を述べているパウロの言葉も、共に、イスラエルがこの訓育を受けたことをさしている。この恩恵と特権はイスラエルに授けられたものであるがそれは仕えられるために授けられたのではなく、仕えるために授けられたのであって、このようにイスラエルが用いられ

ることによってアブラハムの祝福は地の果てにまで広められるのである。

民族を編成する

信仰の実地訓練を一歩一歩踏み進めていくうちに、イスラエルはシナイ山にたどり着いた。イスラエルはそのシナイ山で正式に国として組織、編成され、憲法を与えられた。それは律法と言われている。この律法は三つの部分から成り立っている。その一は十戒といわれる道徳律である。その二はその十戒をどのように日常生活にあてはめていくかということをきめた民法である。その三はイスラエルの礼拝について定め、道徳律や民法にそむいた場合にはどのようにしたら赦されるかということを記した儀式に関する規定である。このうち最も重要な部分は律法全体の根本であり、旧約の中心である十戒である。「その雄大な構想は神の清さを表わし、人たる者の義務の筋道を立て、神にその民と呼ばれる者は、国民としても個人としても、すべて、神に対し、隣人に対し、どのようにしなければならないかということを明らかにするもの」であった。それは文字通り**十**ヶ条のいましめからなり、十は神の力による完成を表わしている。それは二枚の**石**の板に記され、石は不朽のものであることを意味している。それは石の板の**裏表**いっぱいに書かれていて、これ以上つけ加えることは何もないということを示している。

「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだろうか」。これはアモス三・三であるが

この律法は主とその民との間の交わりの基本として与えられたのである。イスラエルは福音を宣べ伝えるために全世界に出て行くあがなわれた民であった。律法はその時の必要に備えて、主がイスラエルに与えられた啓示であった。それは主と主の民との間の一致のきずなとなった。そうして、この律法に素直に従うことにより、イスラエルはやがて、国であり家であるカナンにはいり、神と共にそこに住むことになっているのである。一緒に一つの家に住むという考え方、――これについて注目に価することは、主とその民との関係を預言者がしばしば夫婦の関係のように描き出していることである。(ホセ一・―三・参照)

今、これについて言ってみれば、結婚式はシナイで執り行なわれ、仲人はモーセであった(出一九・一七)。主は誠実を誓い、民の神となることを約束された(出一九・五)。また、民は民として、主に対する誠実を約束した(出一九・八)。そうして、この結びつきのしるしは犠牲の血であった(出二四・五―八)。後に、イスラエルはいくたびかこの律法にそむき、偶像礼拝に走っているが、それは結婚の誓約を破る姦淫の罪として非難されているのである。

わたくしたちは、ここで、神の力によるあがないの計画を中心問題として調べているのであるがこの律法はその計画の目的を達成するために非常に重大な関係をもつものであった。この律法の標準は高いところに置かれていた。民がその標準に従って生活しようとすると、多くの場合、全心をうち込んで神のみ心と一つになることを妨げている罪に汚れた性質に気がついて、そのた

めに心が痛むようになる。詩篇はイスラエルの信仰体験の書であるが、これを見ると、罪に汚れたこの心を変えようとして、神のみ力といつくしみとを切々と祈り求める嘆願の声がいたるところに見出される。(一例として詩五一篇を読むことをお勧めする)

こうして律法はイスラエルの聖徒たちをキリストへ導く養育掛となり(ガラ三・二四)、キリストはその律法ののろいからイスラエルを救うために死なれた(ガラ三・一三)。また、キリストはイスラエルの罪に汚れた心を変えられたのであるが(コリⅡ五・一七)、それは石に書かれた律法ではなく、こんどは神のみ霊で心に記された律法によってであった(エレ三一・三一―三三)。

大いなる王の宮殿

イスラエルと聖なる契約によって一つに結ばれた主は、イスラエルと共に住むための家を作ろうと思われた。それは、イスラエルの人々がその「家」に行きさえすれば、主は常にそこに居られるという定められた場所である。何か必要のあるときにはいつでもそこへ行って主に近づき、そのいつくしみに接し、その恵みにあずかる場所である。この目的を果たすために、主は幕屋を造ることを命じられた。この幕屋は神聖な場所であった。今、この聖書について、三つの方向から考えてみることにしよう。

主の宮

イスラエルは神を君主と仰ぐ神権政治国であった。主はイスラエルの王であり（サム上一二・一二）、幕屋は主の住まわれる場所であった（出二五・八）。それゆえに、幕屋が主の宮殿とみられていたのは当然である。主のみ座は幕屋の内の至聖所にあって、主はみ国の憲法である律法を納めた箱の上にみ座を占めておられた（出二五・二二）。

幕屋の中には主のみ座のある至聖所の手前に聖所があって、主の国務大臣である祭司たちはそこにはいって、主に仕え、また、そこを出て主の律法を国民に教えた。幕屋の庭は王の臣民、すなわちイスラエルの国民に開放されていて、国民は皆、そこに感謝のささげ物、忠誠を表わす供え物を持ってはいり、そこではまた、律法にそむいた者がその事実を告白し、赦しを願うための犠牲がささげられた。また、幕屋は主の民の福利に関すること全体について、主が相談を受ける所であったのである。

その家の家具や飾りつけを見ると、ある程度、その人の性格がわかるものである。掃除の仕方、壁にかけた絵、机やたんすのデザイン、本箱の中にある書物の種類――それらが皆、なんらかの意味でその家に住む人のことを言わず語らずのうちに明らかにしている。それで、この大いなる王がどんな王であるか、その住まわれる宮を調べることによってわかると思う。そこで、まず、これを地上の普通の王の宮殿として考えてみよう。地上の王がその宮殿を造る時には、王はその好みにしたがって、あの部屋、この部屋を造り、家具や調度品の類もすべて王の性格を表わすこ

とになるが、これは取りも直さず、国民に対するその王の気持の表われであり、その王が、現在はもちろん、将来にかけて国民のためにどんな考えをもっているかということを示すものである。このことはまた幕屋の目的を説明している。幕屋は主の性格を表わし、主の意志を表わし、主の目的を表わす象徴であり、典型であった。それは、

㈠ 大いなる王の清さ。

㈡ その民の罪の汚れと内にひそむ反抗心。

㈢ 純真な愛を注いで王に仕えるように民の生活が変えられるための王のはからい。

を教えるような配置になっている。

あがないの計画の手ほどき

幕屋は神のみ力によって作られたひと続きの絵による説明であって、それによって、霊の子供たちの国、イスラエルはあがないの計画の手ほどきを学び、キリストとの明白な体験を望むようになるのである。（ガラ三・二四―四・七参照）神は後に来るあがない主を、たとえば、**義の太陽**とかダビデの**若枝**とか**枝**とか**小羊**とかユダの**し**とかいうふうに、常に自然になぞらえて語られるが、幕屋についても同じように、神はいろいろと違った家具を使い、礼拝と関連のあるいろいろな品物を使って、後に来る全き救いを説明しておられる。

幕屋は白い幕で囲まれていた。イスラエルの人はその白い幕を見ると、自分は罪に汚れていて

神のみ前に立つことができないと感じる。しかし、とびらが一つあるのを見つけて彼らは喜ぶことが出来た。それは、イスラエル人はそこから幕屋にはいることができたからである。はいるとすぐに大きな銅の洗盤が目につく。人々はそれによって、自分の罪が赦されることを知ることができる。幕屋にはいって自分の代理を勤める祭司のすることを見ていると、祭司は聖所にはいる前に洗盤で手と足とを洗う。それを見て、神に仕えるためには清めが必要であるということを知る。祭司が燭台の七つの枝に分かれた芯を切ると、それで、霊的啓示という真理を知る。十二の供えのパンをのせた机は、神が与えられる霊のかてを示している。至聖所を隔てる幕の前の香炉をおく金の祭壇は神のみ前の執りなしの力とその尊さとを示している。祭司は至聖所を隔てている幕のところまでしか行くことができない。それで、まだ神の前に徹底的に近づき切ることはできないということがわかる。ところが、ここに特にあがないの日というのがあって、民を代表する大祭司が神秘に閉ざされた宮にはいって贖罪所にあがないの血を注ぐ。イスラエルの民は、それをもって、やがて来るはずの日に完全なあがないが行なわれると信じて安心したのである。

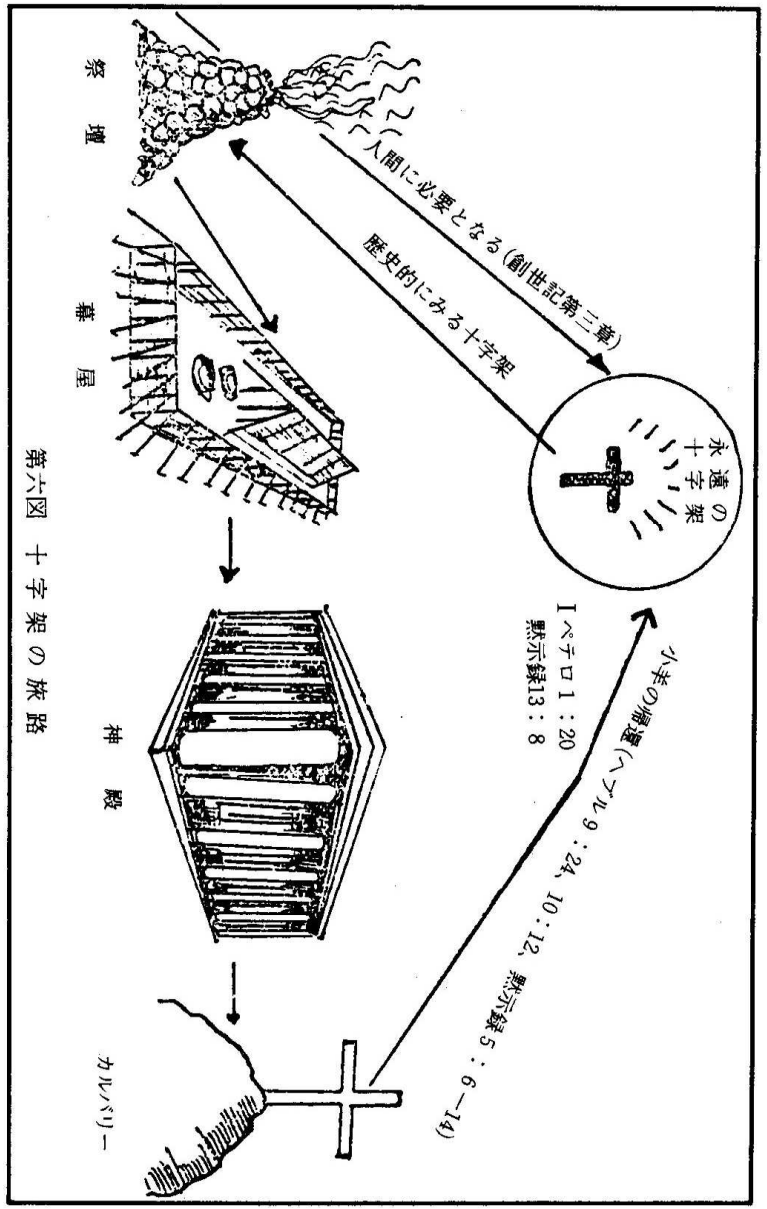
しかし、人間は、こういう道具だてのうちに、あがないの手ほどきを受けただけで、そこにいつまでも足踏みをしていることはできなかった。雄牛ややぎの血には永遠の救いを与える力はないということを知るようになった。洗盤から本当の霊の清めが出てくるとは思わなくなった。金の燭台は幾万という暗い心に光を与えることはできないと感じてきた。供えのパンは群衆を養い

切れないと気づいた。金の祭壇は天を引き裂いて完全な救いを招き寄せることはできないと知るようになった。こういうものは皆、実は、どこかに本当のものがあって、やがてそれが来るということを示す影にしかすぎなかったのである。そうして、**神の小羊**があがないをされ、世の**光**が現われ、命のパンが御自分を言い表わし、**大祭司、きよめ手のイエス**がまことの至聖所、天にあげられ、これらのものが全部完成されると、およそ一世代の間にユダヤ教の**神殿**（神殿は幕屋を永久建築の形にしたもの）は、その時から過去のものとなってしまった。しかし、神殿はキリスト・イエスによって成就されるこれらのことを通して人類を教え導くという神のみわざをなしとげたのである。神は必ず栄え、神殿は衰えなければならなかったのである。こうして神殿の意味は消えていった。しかし、それは生命を与える起死回生の水・神の真理をわたくしたちの口もとに運んでくれた尊い杯とも、真理の化身であるイエスのことを絶えずわたくしたちに思い出させてくれる**仲立ち**とも考えることができるのである。

あがないの計画の先触れ

幕屋は神のあがないの御計画の先触れとして、神が示されたものである。（第六図参照）

キリストの十字架は、天において神の心・神の頭の中に、天地の造られる前、それが地に現われる前から、すでにあったのである（ペテⅠ一・一九、二〇、黙一三・八）。堕落したのち、人間は心のうちにやむにやまれぬ救いへの願いを抱いた。その切々たる願いが人間の歴史に十字架の



第六図　十字架の旅路

顕現をもたらしたのである。あがないの真理は十字架によって表わされたのであるが、初めはイスラエルの先祖たちの礼拝の場所である祭壇を通して示されていた。それが次第に、幕屋、神殿という形をとるようになって、救いの計画は着々と完全なものへと近づいていった。そうして、ついに救い主の処刑という段階に達して、この世の始められる前から、神の心・神の頭の中にあった十字架が、カルバリーにうち立てられたのである。祭壇は荒々しいローマの十字架に替えられ、小羊は神のみ子その人と替えられた。あがないのみわざをなしとげられた後、主はよみがえり、父のみもとにあげられ、わたくしたちのために祭司の役目を続けておられる。そうして、やがて来る日には

「ほふられた小羊こそは、
力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、
さんびとを受けるにふさわしい」

と、歌う天の軍勢、あがなわれた者、造られたすべてのものの礼拝を受けられるのである。

神のみ前での礼法

英国では、王や王女の前に伺候する人は、あらかじめ、その時の服装、あいさつの仕方、言葉づかい、その他のことについて、こと細かな注意を受けることになっている。つまり、宮廷礼法

というものを仕込まれるわけである。それはこの大帝国の尊厳と権威とを代表する方には、尊敬と崇敬とをもって近づかなければならないという考えからである。同じように、全地を治められる主なる神も、そのみ前に出る者の従うべき規則を定められた。国造りのそもそもの初めから、民に対して主は冒すべからざる大いなる王として臨まれた。その定められた規則は旧約聖書のレビ記に記されているが、それは簡単に書き出すと、次のようになる。

㈠ 犠牲は、罪をおおい隠すためのあがないの血を流すことなしに、主に近づくことができないということを教えている。

㈡ 身をすすぐこと、衣服を洗うこと、それは「主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」（レビ一九・二）ということを教えている。

㈢ 祭司の役をする者の定めは、民は直接王に近づく資格がなく、仲立ちをする者、執り成しをする者が必要であるということを教えている。

レビ記の規則は今日のクリスチャンを拘束するものではないが、しかし、新約聖書をよく読むと君の君のみ前に出るときには、何の準備もなくいきなり飛び出していってはいけないということを教えられる。

約束の地へ近づく

前にも書いたが、聖書に記されている大いなる神のあがないの計画は、人間がいくらつまずいたところでそれで妨害されるというようなものではなかった。それはゆるぎない基盤の上に立てられた計画であって、民数記にはこのことがはっきりと記されている。（民一四章参照）

――神は神がその民と共にいますことを示され、神のみ力の大いなる顕現をもってその民をエジプトからあがない出し、これを固められ、こうしてイスラエルはカデシ・バルネアに到着した。カデシ・バルネアは転機の地であった。このカデシ・バルネアからイスラエルはカナンへと進んで行ったのである。イスラエルはつまずき、その罰を受けた。その話はだれでも知っている。イスラエルのそのつまずきのために、主の御計画は延ばされたが、しかし、それで敗北に帰してしまったのではない。「わたしは生きている。また主の栄光が、全世界に満ちている」（民一四・二一）と、主は言っておられるのである。

イスラエルはあのカルバリーでもつまずいて、失敗を重ねている。カルバリーはイスラエルの国家としての危機であった（ルカ一九・四一―四四）。しかし、そのつまずきにもかかわらず、全世界は主の栄光に満たされている。それは、イスラエルの失敗によって、救いは異邦人の上に押し広められたからである。このようにして主は異邦人をおとずれられたのであるから、終わりの時には、再び御自分の民をおとずれられるのである（ロマ一一・一一、一二）。

パウロは、人間のつまずきや失敗などで敗れ去ることのない神の御計画のうちに働く知恵に感

動してこのように歌いたたえている。

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。……、万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように」(ロマ一一・三三、三六)。

神のしもべは死ぬ。しかし、神のしもべは死んでも、神の御計画が打ち切りになるようなことはない。申命記にはモーセの死とその最後の説教とが記されている。このように、働き人は変わっていく。しかし、みわざは続けられる。用いられる器がその役目を果たし終えると神は新しくほかの器を捜し出される。いつでも、その時代のモーセが死ぬとき、神のみ手にはヨシュアがある。そうして、このヨシュアをモーセのなきあとに立て、そのみわざを行ない続けられるのである。

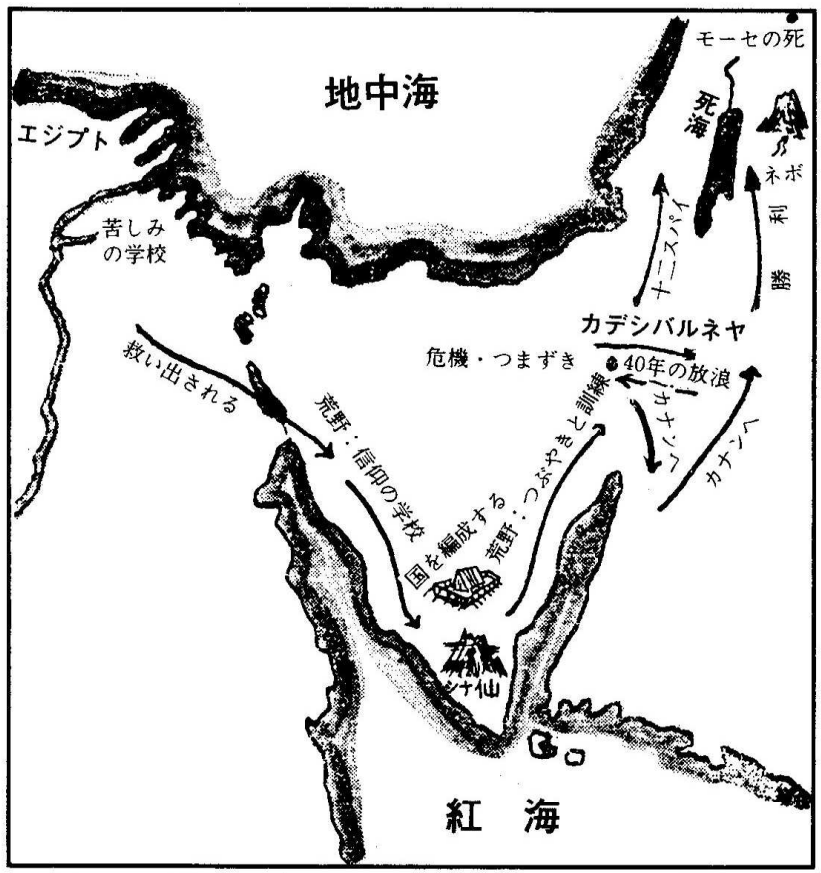
「国の誕生とその訓育」——歴史的なまとめ

エジプト ＝ イスラエルの苦しみの学校

一、苦しみが民族を団結に導く

二、苦しみがほかの民族と混じらないものとする

三、神を求めなければならないと考えるようになる。



第七図　エジプトから約束の地まで

四、神の新しい黙示に対する準備をさせる
五、実地についての訓練を受ける

救い出し ＝ 国の誕生
一、誕生、訓練、モーセの召命
二、災・イスラエル、神のみ力により救い出される
三、過越・イスラエル、あがないの血によって護られる
四、紅海で水の洗礼を受け（コリⅠ一〇・一、二）新しい命にはいる

荒野 ＝ イスラエルの信仰の学校
一、荒野の食べ物……マナ
二、荒野のいこい……岩からの水
三、荒野の導き……火の柱・雲の柱
四、荒野の勝利……アマレク人の敗北

シナイ山 ＝ イスラエルの編成
一、律法の契約
二、イスラエルのあがないの学校……幕屋を建てる
三、イスラエルの聖なる学校……レビ族の律法

四、民を数え、国を編成する

カデシ・バルネアへ ＝ 危機
一、荒野で……つぶやき、そむき、処罰される
二、断固として神を拒む……十二スパイの報告に失望する。
三、刑罰……四十年間にわたる国家的死

新しい世代によるカナンへの行進
一、モーセの罪。新しい世代に対する新しい指導者が与えられる
二、アロンの死。新しい世代に対する新しい大祭司が与えられる
三、つぶやき、処罰、勝利
四、カナンの境で、モーセ死ぬ。ヨシュア、指揮をとる。

第四章　孤立と離散

（ヨシュア記からエステル記まで）

神はすべての国々に、唯一のまことの神とそのあがないの計画とを理解させようとしておられた。全世界にわたるこの使命はイスラエルの肩に負わされていたが、使命を全うするための準備として、神はその民にどのように臨まれたかというと、そこには二つの段階がある。その段階の第一は孤立の時代である。この時代、イスラエルは民族的に国を閉ざし、ほかの国々、ほかの国民から全く切り離されていた。第二の段階は離散の時代である。この時代、イスラエルは鎖国と孤立とから解放され、民は散らされて、ほかの国々、ほかの国民と自由に交わったのである。

イスラエルの孤立（ヨシュア記から歴代志まで）

孤立の時代は、イスラエルがひとつの土地に住みついていた時代である。イスラエルは、その土地で、モーセを通して与えられた律法やしきたりで仕込まれ、また、預言者の務めによって、やがて来るはずの神の国の希望をかきたてられていた。イスラエルは国家の任務として、まことの神をあかしし、神のみ言葉をあかししなければならなかった。主は、イスラエルがこの任務を

携えて全世界の国々と交わることを許されたことに先立ち、そのお取り扱いを通して、この国の民があらゆるほかの国々の国民とはどこまでも全く違うということを、その国民性の上に刻みつけられたのである。

そこで、このイスラエルの他国からの分離がどのようなものであったか、いろいろな角度からこれを考えてみよう。

カナンでの定住

主はアブラハムと約束された。その約束は、すべての国々はアブラハムの子孫の手によって祝福されその子孫は後に**一つの国**を形づくり、その国はこのあがないの導管となり、やがて、**一つの土地**が与えられて、そこでその大使命に対する準備が行なわれるという趣旨のものであった。このひとつの土地というのがカナンの地であった。そうして、カナンは主の顕現の舞台となり、その舞台の上で、神の栄光と全世界救済とを表わす出来事が起こるのである。ヨシュア記を見るとイスラエルがどのようにしてこの新天地を手に入れたかということがわかる。この土地の地主は主であった。そうして、イスラエルの来るまでの借地人たちはこの主の所有地を汚していた（創一五・一六、レビ一八・二四、二五）。

それで、地主の主は、この悪い借地人を追い払い、その後にその土地を手に入れるための役目

をイスラエルに与えられたのである。土地は本当はイスラエルのものではない。ただある条件のもとに借りているにすぎない（レビ二五・二三）。その条件に（レビ二六章、申二八章）そむくならば、イスラエルは追放されてしまうのである。

律　法

組み合わされた儀式礼典、ユダヤ教全体を作りあげる縦横の関係、それは次第に整ってきて、この約束の地で完全なものとなった。そうして、ソロモンの時代にその絶頂を極めた。モーセの律法がいかにイスラエルを他国から分離していたかということは、ペテロの次の言葉がこれをよく説明している。

使徒一〇・二八――「ペテロは彼らに言った、『あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました……』

預言者の務め

祭司の務めはイスラエルの民をもろもろの国から引き離しておくためのものであったが、預言者の務めは一口に言えば、民の前に常にこの引き離しの**目的**が何であるかということを示しておくためのものであった（イザヤ四三・一〇―一二）。

イスラエルはしばしば国民的背教に陥った。そういう時期には、預言者は命あるこの宗教の炎をもやし続ける役目を果たした（王上一八章）。また、イスラエルはときどき国家的な災害に見舞われた。そういう時期には、民は永遠のあがないをもたらすメシヤの来られることを心頼みに、その信仰を励まされた。神のみ霊の働きは、預言者を通して、イスラエルの国民性にひとつの影響を及ぼした。その影響は、イスラエルに、イスラエルはほかのあらゆる国々の国民とは全然違うという意識を与えた。――これは特に、極端な近代主義信奉者のあるユダヤ系著述家の認める説であるがその著述家は、ユダヤ人のうちに作りあげられた「何か」神秘的なものは、これらの預言者を通して働いたこの力のせいであるとしている。

イスラエルの離散（エズラ記からエステル記まで）

離散はもともと神のみ心のうちにある伝道であった。神はこの離散を用いて、キリストが来られるということに対して異邦人の世界にその準備をさせられたのである。イスラエルは神の前に悪を行なった。神の審判は下され、捕囚が起こった。この捕囚はイスラエルを離散の憂き目にあわせた。それは神がイスラエルに最善をなされたということにはならないが、しかし神の目的を達成するためには「すべてのこと」相働きて益となる、そのひとつであったのである。

ここに興味のあることは、神がその民を鍛練して世界伝道の役に立てようとして送られた所が、その昔アブラハムが世界をあがなうあがないについて教えを受けたバビロニヤであったということである。神はその民に信仰を教えるために、先祖アブラハムが初めて信仰を学んだのと同じ異教の地、同じ環境の中へ送り入れられたものとみえる。

今、その経験がイスラエルをどのように整えていったかということを考えてみよう。

イスラエルは偶像礼拝をことごとく清められて、バビロンから帰って来た。それは神は唯一であること、神は霊であることをあかしする人々にとっては是非とも必要な作り変えであった。また、イスラエルは、神について今までよりも広く深い知識を得て帰って来た。敵の手によって神殿は破壊された後、主は限られた一つの建物のうちにだけおられるのではなく、心砕けてへりくだる霊と共におられるということを知った。捕囚の間は犠牲をささげることができなかった。それで、ひたすらにその身をささげてまかせきった生活をするならば、主はそれを犠牲として受け入れられたということを教えられた。

他国民との交際はイスラエルのものの見方を広くした。それが非常に徐々に、幾年月かをかけてではあるが、イスラエルにその宗教を他国民にも分け与えることができるということをわからせた。預言者たちは、全世界のあがないをメッセージとして語ったが、その教えを受けて、イスラエルは、自分たちは罪と偶像との暗やみに沈む異邦人の上に光を投げ与えるための主のあかし

人であるという自覚を深めていった。

イスラエルは帰って来た。しかし、それはもはや**政治**のための集団ではなかった。**宗教**を中心とする団体であった。そしてその団体は、モーセの教え、預言者たちの言葉を土台とした霊的な命を成長させ、あがない主が来られると説く聖書の言葉を保存し、また、全世界に分け与える働きをすべきものであった。

やがてエルサレムは復興された。しかし、それはダビデ、ソロモン当時のあの大いなる首都としてではなかった。エルサレムは離散したイスラエルの霊の本部、後に「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか」と尋ねて来る異邦人のための神の真理の「案内書」として再建されたのである。

しかし、異邦人の圧迫は強かった。その圧迫に心がくずれて弱まりを感じると、民は切々たる思いでメシヤを求め、そのメシヤが圧迫者を打ち滅ぼし、主の国を作られることを慕い求めた。また、預言者の声がはたと絶えて、どちらを向いても何も聞こえない時代もあった。そのとき、ユダヤ人たちは昔のメッセージを一心に思いつめて、救い主が来られるという火のような預言に、その心を暖めた。だから、イエスが現われた時、メシヤの国は近づいたという大きな期待があったのである。

イスラエルは回復された。しかし、諸国に残されたユダヤ人たちは定期的に宮へ行って神に仕

えることができなかった。そこで、その霊的不満足を満たすためにも、また、いろいろな町にいるユダヤ人がひとつになるためにも、何か中心が必要であった。そのために各国各所に造られたのが会堂（集会所）である。会堂では祈りがもたれ、聖書が読まれ、その説き明かしがなされた。この会堂の役目を神の目的から見ると、それは異邦人の世界に文字による神のみ言葉を移し入れ、やがて来られる救い主の福音をもろもろの国々に広めるということであった。会堂は異邦人の回心者（新約聖書では改宗者と言っている）を大勢作り出した。その多くは最初の福音説教でその実を結んだのである(使徒一三・四三)。聖書を写し、また解釈する人として、この時代に、律法学者というものが出てきたことは明らかである。

このようにイスラエルの人々は異邦人との交わりを広げていった。しかし、**表面**その交わりが繁くなるにつれて、かえって**内面**ではこれに対する反発が固められていった。これはエズラとネヘミヤとによって表面化された。ふたりは「ホーリネス運動」の創始者であるが、これはモーセの律法を厳重に守るということに始まり、「汚れから離れる」という標語を掲げたものである。この熱心な宗教改革論者たちのしたことは、エズラ九章、一〇章にその一例を見ることができる。――そのころ、イスラエルの民で異邦の女をめとっている者が沢山あった。エルサレムに来たエズラはそれを知って、衝撃を受けた。神の宮の前に泣き伏して祈り、かつ、ざんげしてから、エズラは民にその異邦の妻を離婚するようにと命じた。この処置は今の人の耳には残酷に響くかも

しれないが、イスラエルはこうして霊的に救われたのである。もしこの厳重な処置がとられなかったならば、ユダヤの国は堤のない川のように広がりあふれて、沼地のようにふやけた堕落の底に落ちていったに違いない。

この時代に、**預言者**の支配は終わって、**祭司**の支配が始まる。祭司は形式に流れ、神からの霊感も受けず、預言者の持っていた力もなかったが、民の前にモーセの律法を保って重要な働きをしていた。神からの預言という面から見るならば、イスラエルはこうして暗いトンネルの中へとはいっていく。そうして、「悔い改めよ、天国は近づいた」と、荒野で呼ばわる声のするまで、四百年の沈黙が始まるのである。

「孤立と離散」――歴史的なまとめ

士師のもとにあるイスラエル

一、ヨシュアに導かれてカナンを勝ち取る。

二、士師のもとでこの国は分離された部族として戦う。秩序のない時代、罪、苦役、悲しみ、救いの物語。

三、最後の士師サムエル、国を統一して王を立てる。

連合王国

一、王位を失った人、サウルの物語。
二、大帝国を建てた王、政治家、詩人、軍人、ダビデの物語。
三、その治世が栄華で始まり災害で終わるソロモンの物語。

分立王国

一、イスラエルについて……戦争、宗教的争い、強奪、暗殺の悲しい物語。エリヤ、エリシャ、ホセア、アモス、説教をする。捕囚としてアッスリヤに連れて行かれ、ふたたび一国としては帰れなくなる。
二、ユダについて……北部王国がなくなってから約百年続いていた南部王国。
政治の面から ＝ 陰謀、外国への侵入、外国との同盟、北部王国と時には戦争、時には同盟。捕囚として、ネブカデネザルによってバビロンに連れて行かれる。
宗教の面から ＝ 神を敬う王、悪しき王、背教、改革。預言者のメッセージを退ける。堕落と背教の結果、ついに神の審判が下される。

捕囚

一、バビロンに七十年。
二、エゼキエルの預言、ダニエルの預言。
三、離散が始まる。

帰還

一、ペルシャ王クロスの好意による。
二、生き残った者、初代総督ゼルバベルと共に帰る。
三、宮を再建する。ハガイ、ゼカリヤ、説教をする。
四、律法学者エズラ、律法を教え宗教の復興を図る。
五、ネヘミヤ、総督となり、エルサレムの城壁を再建し、改革を行なう。

「孤立と離散」——神の御計画の面からのまとめ

孤立（イスラエル、信仰を学ぶ）

一、全世界伝道の使命のためにカナンにその訓練学校を建てる。
二、律法や儀式の訓練が行なわれる。教育と聖別。
三、特に神の召しを民の前に全うした預言者の務め。

離散（イスラエル、信仰を宣べ伝える）

一、偶像礼拝から離れる。
二、異邦人との交わりにより、その見解が広められる。
三、政治の集団ではなく、宗教団体として帰ってくる。

四、異邦人の圧迫下に、メシヤを慕い求める。
五、会堂を建て、律法と預言とで異邦人を導く。
六、エズラによる断固とした他国との分離。世界のうちに在るが、世界に混じらないということの確認。
七、預言者の務め終わる。祭司が国家の孤立分離を守り、律法学者がみ言葉を保存する。

第五章　イスラエル人の心情

（ヨブ記から雅歌まで）

詩書と、歴史書や預言書など旧約の他の部分との関係は、大体次のように説明することができる。

歴史書によって、わたくしたちはイスラエル人が**どのようなことをしたか**ということを知ることができる。

詩書によって、わたくしたちはイスラエル人が**どのように感じたか**ということを知ることができる。

預言書によって、わたくしたちはイスラエル人が**どのように説教したか**ということを知ることができる。

詩書は、神のあがないの現われを待つ選ばれた国イスラエルが、その感情を表現し、その深い体験を発表したものである。そこに、わたくしたちは、神のお取り扱いに対するイスラエルの心の動きを見、神が体験させて下さった悲しく辛かったこと、楽しかったことに対するイスラエルの心の響きを聞くことができる。この章に、「イスラエル人の心情」という題名をつけたのはこ

のためである。

ヨブ記

旧約聖書の聖者ヨブは、その体験を通して、この世の事柄は神の愛に逆らい、神の公義に逆らい、神のあがないの計画に逆らうものらしいということに気付いたのである。ヨブ記はヨブを苦しめたひとつの問題を取り扱ったもので、「なぜ、正しい者が悩むのか」ということが、その問題の中心になっている。ヨブ記で、ヨブは、はかり知れない神の行ないは批判してはならない、神の行なわれることは、その時その場ではその一部が見えるだけで、やがて、神のお取り扱いの結末がわかり神の御計画の全体がわかってくる、それまでは信仰をもって待つよりほかにないということを教えている(ヤコ五・一一)。全知全能全愛の神が世界のみ座についておられるのであるから、神の民には、いろいろのことがあるのではあろうが、結局すべては良くなるのである。

詩篇

詩篇はユダヤの国の大きな讃美歌の本であった。讃美歌は霊的体験のほとばしり出たものである。ゆえに、詩篇は旧約聖書の聖徒がどのような霊的生活をしたかという、その感情面からの記録である。その意味でこれを見るならば、その人の体験の全体にわたって神と人との関係がどの

ようであったかということを知ることができる。詩篇は、今では**わたくしたち**の讃美歌の本である。

こういう話がある。ヨーロッパのある地方に大火事があって、その辺一帯をなめつくし、くだもの畑は全部灰になってしまって、取り返しのつかない大きな損害を受けたように見えた。しかし、痛手とみえたその大損害も、実は損害ではなく、却って利益となっていたことがわかった。火事はその地方の岩盤を焼いて、そこにひそんでいた銀の鉱脈を露出してくれていたのである。これと同じ方法で、神のみ霊の火は旧約聖書の信者たちを焼きつくし、熱くし、混じりけのないものとし、清くし、明らかにした。この神の火によって、わたくしたちは、今日、貴重な鉱脈を受け継ぎ生命の泉を豊かにするために、いつでもそれを掘ることができるようになったのである。ペテロは、主イエスのことを見知らぬ人と言って否定する苦しい体験をしたが、その後、信仰の友を強め、力づけることが出来るようにされた。神の目的はそのようなものであって、旧約の信者たちのいろいろな体験は、わたしたちへの戒め、慰めとして記されているのである。

詩篇はずっと読んでいくと、旧約聖書教会の、**あかしの集会**に出席しているような気がしてくる。そこには、望みを失った苦しみ、胸の張り裂けるような悲しみ、霊の暗やみ、道徳心の弱まりというようなことが語られている。しかし、同時にまた、主がその問題をことごとく解決し、完全な救いの喜びのうちに救い入れられたということも、必ず記されている。「救い出す」という言葉は詩篇のうちの中心となる言葉のひとつである。

わたくしたちは、旧約聖書教会の**祈禱会**にも出席している。歴史書では神が人を語られ、預言書では神が人に語りかけておられたが、この詩篇では、魂の底からその願い、讃美、ざんげを注ぎ出して**人が神に**語りかけている言葉を聞く。

詩篇を読む者は、読み始めるとすぐに、讃美の**大合唱**のただ中にいることに気がつく。この本の中心問題であるあがないの計画に関するものには、**夜の歌**があり、**即位の歌**があり、**千年期の歌**がある。夜の歌のあるものは神の御計画が失敗に帰したかに見えたときの歌（詩八九・特に三二―五二節）であり、即位の歌は救い主であられる王の出御を祝う歌（詩四五・、一二四・など）であり、千年期の歌はやがて来たるべき神のみ国の栄光をたたえる歌（詩七二・）である。この詩篇の最後は**ハレルヤ・コーラス**の一大合唱で閉じられている。そのコーラスは未来を描き出す絵のひとこまであって、救われた者がすべて一団となり、わたくしたちを愛してくださり、その血潮で罪を洗い清めてくださった主をほめたたえて力強く歌いあげる時の、その歌声なのである。

箴　言

未来のあがないを待っていても、イスラエルの人々は**現在**の義務、しなければならないことを忘れてしまってはいけない。そこで、ソロモンをはじめ、神から知恵を授けられた人々の手によっていま箴言のうちに収められているようなことが書かれた。それは地上の生活に対する天の命

令であり、また、日々の行ないに対する道しるべでもあった。

伝道の書

イスラエルがひとつの国家として、さまざまの経験を積み重ねていくうちに、神を恐れることから離れていく者が大勢出てきた。神を恐れることは人間の知恵の始まりであるが、イスラエルの人々は神の正しさと人間に負わせられた神の目的とに関する問題について疑問をもつようになった。そういう人々のうちにエルサレムの王ソロモンがいた。そのソロモンが伝道の書を書いたのである。ソロモンは神から離れて、富や楽しみや知識や社会的業績などに、その満足を求めようとした。そうして、その欲求の結果を、ソロモンは「空の空、空の空、いっさいは空である」と繰り返し書いている。

しかし、ソロモンはその堕落の底で考え苦しんだあげく、ついに「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」と、竹を割る音のような気持ちのよいあかしを立てているのである。

雅　歌

このソロモンの歌は旧約聖書のうちの、愛のしらべである。このしらべは、花婿花嫁の愛にな

ぞらえて、神と神の民との間の愛をわたくしたちに教えている。美しいこの歌は、

「愛は大水も消すことができない、
洪水もおぼれさせることができない。
もし人がその財産をことごとく与えて、
愛に換えようとするならば、
いたくいやしめられるでしょう」（雅八・七）

と、あかしをし、また、雅歌のうちの兄弟の愛の歌は、新約聖書の、「このうちで最も大いなるものは、愛である」（コリⅠ一三・一三）という兄弟愛に関する大いなる歌のために備えられている。

第六章　イスラエルの伝道者

（イザヤ書からマラキ書まで）

イスラエルの伝道者はどのような人々であったのか

ヘブライの預言者といえば、未来のことばかりに没頭している、浮き世ばなれした神秘に満ちた不思議な人物というふうに思われているのが普通である。なるほど、預言者は未来の出来事を預言していた。しかし、それは彼らのメッセージの一部に過ぎない。彼らは当時の出来事についてメッセージを語っているからである。ヘブライの預言者たちは実際に大いなるものの力を受けてはいたが、しかし、その本体はわたくしたちと同じ人間であったのである（ヤコ五・一七）。この平凡普通の信仰者が、聖霊に感じて非凡異常になっただけのことである（ペテⅡ一・二一）。そこで、預言者を、**聖霊に油をそそがれた**イスラエルの**伝道者**というふうに考えてみるならば、ずっと真実味がわき、ずっと人間味が出ると思う。

預言者の役目を祭司の役目と比べてみると、そこには大きな対照が目立つが、しかし、預言者もまた、神によって定められたものである。

祭司

レビ族の男子に限られている。
その資格はきびしい規則で定められている。
組織宗教の固着性を示す。
過去の人であって、既にある黙示を解釈する。
一口に言えば、神の前に人々を代表している人で、人々の来るのを待つ人である。

預言者

部族の制限も男女の制限もない。
み霊の自由な子であり、その資格は神のみ霊が臨んでいるということだけである。
新しい状態に応ずるために神によってその制度や規則の変えられることを示す。
未来の人であって、新しい環境に応ずる新しい黙示を導き入れ、神の感動の川の新しい水路を作る。
一口に言えば、人に対して神を現わす人で、進んで神の言葉を人々に告げ知らせる。

イスラエルの伝道者はどのようなことを見たか

まず、第八図を見ることにしよう。
下の方にある山々は「預言の山のいただき」と言っていいし、「預言の展望」と言ってもいい。
そこで、預言者の立っている現在を中心にして、うしろを眺め、前を望んでみよう。

うしろを見る

預言者は新しい黙示を告げ知らせたが、その黙示は過去の約束の上に立ち、過去の契約に基づいたものだった。すなわち、あがないの約束は創世記三・一五に

「わたしは恨みをおく、
おまえと女とのあいだに、
おまえのすえと女のすえとの間に。
彼はおまえのかしらを砕き、
おまえは彼のかかとを砕くであろう」

と、あるのであるが、これは当時の預言者のメッセージの根拠のひとつである。預言者たちはこの約束に基づいて、あがないはイスラエル、パレスチナから始められ、やがて全世界に広がり、全世界の人々の上に広められると言って、そのあがないの先ぶれの役を果たしたのである。また、このあがないは神がアブラハムになされた契約を全うすることにもなる（ミカ七・二〇）。

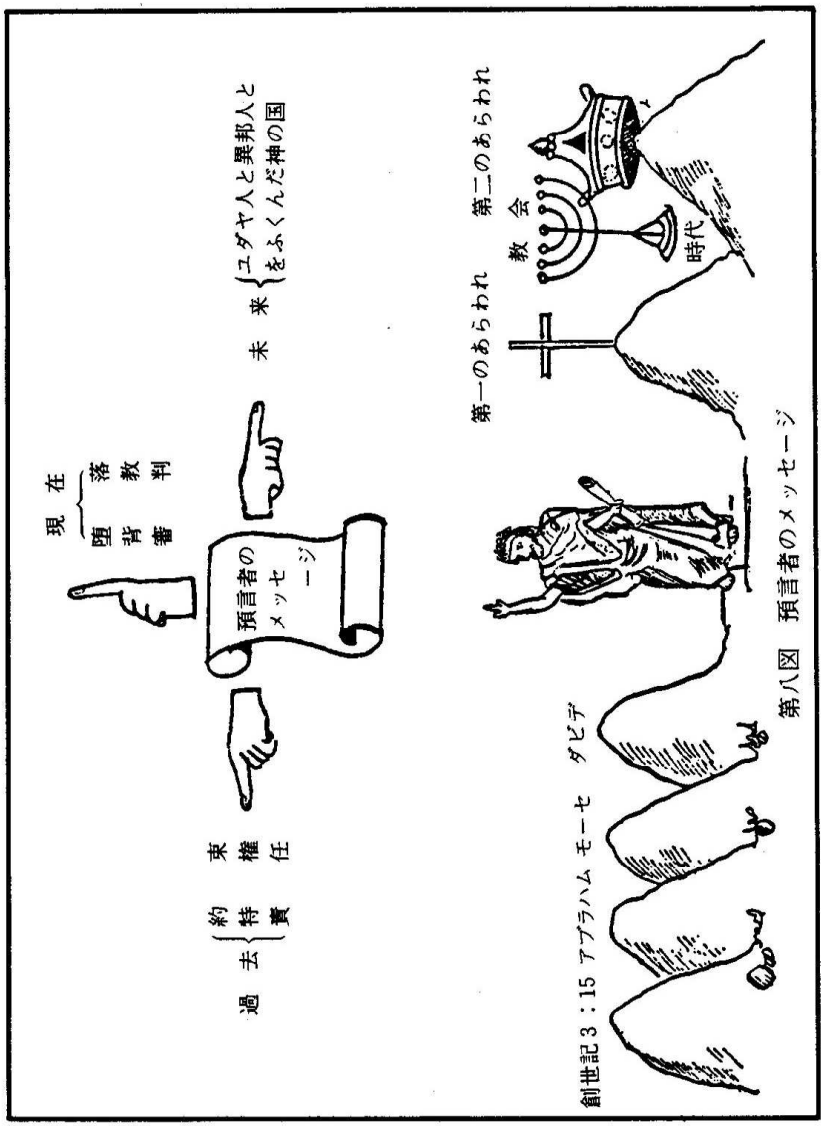
預言者たちは、モーセの律法に背いたことのゆえに人々を責め、また、十戒の第一条、第二条を破ったことのゆえに、霊的姦淫であると非難した（エレ三・二〇）。振り返ってダビデを見て、預言者たちは、ダビデの家から世界の王となる大いなる者の出ることを語った（イザ九・六、七、

エゼ三四・二三、二四、ホセ三・五)。これらの引照と合わせて詩七二篇を読むとよい。

前を見る

預言者たちは救世主を、苦しまれた面(イザ五三・)、とあげられた面と、その二面から見るようにさせられていた(エレ二三・五、六)。

ペテロI一・一〇、一一を読むと、預言者たちは、苦しまれ、死なれた救世主がどのようにしてあげられ、栄光を受けられたかということを考えて、はたと行き詰まってしまったらしいことがわかる。預言者たちはその点で困ったが、それはこの問題の解決のむずかしさを知った者のユダヤ教の学者たちの態度の上に出てきている。その学者は、その解決の一方法として、救世主を二人考え、一人はもろもろの国と戦って戦死を遂げるヨセフの子メシヤで、もう一人は栄光のうちに国を治めるダビデの子メシヤであると考えていた。預言者たちはこの啓示を理解することができなかった。それは、救世主は二度来られるのであるが、その第一の現われと第二の現われとの間に、信ずる者を一体とする教会というものができて、その教会によってユダヤ人も異邦人も神の前にひとつとされるという真理が、当時は知らされていなかったからである(エペ三・三―六)。



第八図 預言者のメッセージ

イスラエルの伝道者はどのようなことを説いたか

第八図の上の方を見よう。

預言者たちは過去、現在、未来にわたって説いている。過去については、**昔あったことを語った。**預言者はユダヤの歴史を解説する人であって、そのメッセージの背景に歴史を織り込んで、人々に歴史に含まれている多くの教えを教えた。

現在については、**その時その場合に応じてききめのあることを語った。**この場合、預言者は霊的宗教の力強い説教者となって人々の前に立った。たとえば、犠牲は神の定められたものであるが正しい行ないをしようともしないで、犠牲ですべてをごまかしていこうというようなときには、預言者は主のみ名によってそれが形式的なものにすぎないということをあばいた（イザ一・一〇―一七、ホセ六・六、アモ五・二一―二四）。

人間は、ものごとの本体をつかまえないで、何か象徴的なもので間に合わせようとしたり、ものごとの本質を実行のうちに取り入れないで、何か目の前にあるものに屈服しようとする性質をもっている。預言者はこういう人間の動きを非難攻撃したのである。

幾年か前のことであった。ミシシッピーの谷間のケンタッキー・コーヒーの木が全滅しそうだというニュースを聞いた。豆はさやのなかで生長していたのであるが、そのさやの皮がとても固

くて生きたまま胚種は外へ出ることができなくなっているということである。

イスラエルもこれと同じように、あるとき、形式主義の固いからにおおわれて、宗教的生命はそのうちで窒息しそうになっていたのである。第九図は、イスラエルのまことの宗教が生命のない儀式一点張りに陥り、これに対して預言者がどのように働きかけたかということを示す。Aでは、神のみ力による宗教が生命にあふれ、光明に満ち満ちた姿で始められている。Bでは、宗教に必要な形式、組織ができかけている。それは点線で示されているが、まだ、邪魔になるほど固まってはいない。Cでは、その形式、組織が鋳型のように固くなって、宗教の生命はだんだん窒息へと追い込まれている。最後に、神のみ言葉のハンマーを手にした預言者が現われて、この儀式一点張りの固いからを打ち砕く（エレ二三・二九）。

正しい行ないからはずれて、宗教的堕落に陥ると、そこには背教が始まる。そうして、背教は審判の宣言となるのである。

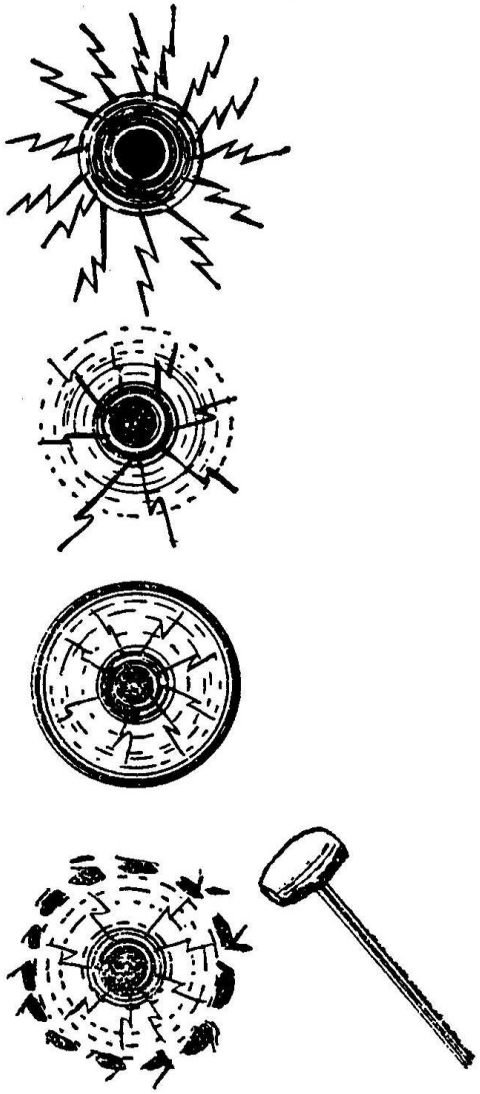
未来については、**これから起こるべきことが語られた。**預言者たちは、イスラエルが患難を通して清められ、イスラエルの敵が罰せられる主の日について語った。このようにして、神の国は、救世主のもとに、カナンの地パレスチナにイスラエルが集められるときに、異邦人が悔い改めてエルサレムをその霊の中心と考えるようになるとき、訪れるのである。

A

B

C

D



第九図　形式のとりことなり
預言者によって解き放される

イスラエルの伝道者はどのような本を書いたか

今度は、ここに、このような神の人々について、一人一人考えてみることにしよう。

イザヤ——旧約聖書の福音伝道者。その本には救世主と神の国との預言が沢山書いてある。

エレミヤ——涙の預言者、エルサレム破滅の前のエレミヤの働きは、丁度、死刑の宣告を受けた極悪人の前をその罪状を呼ばわりながら行く先ぶれにもなぞらえてよいものである。エレミヤは涙にペンをひたして、なつかしの都エルサレムの破滅を書きつづった預言者である。

エゼキエル——捕囚の牧師。イスラエルが国家の形成をこわされたとき、バビロンでユダヤ人に個人伝道を行なった。ユダの背教のために、栄光が神殿を去って行くのを見た。「イカボデ！」そうして終わりの日に、千年王国の神殿に栄光の帰ってくるのを見た。「エホバシャンマ！」

ダニエル——異邦人の時の預言者。世界の大帝国が起こり、やがてそれらが人の子の国の前に滅びることを預言した。

ホセア——胸の張り裂けるほどの悲しみに嘆き沈んだ預言者。不信実な妻によって負わされた悲しみを通して神にそむいたイスラエルに対する主の愛を身をもって体得した。

ヨエル——ペンテコステの預言者。神はすべての人の上にその霊を注ごうと言われた。

アモス——牧者であった預言者。「昔の信仰」をかえりみて、一心に嘆き祈り、罪を犯し、とがを

増し加えるイスラエルに審判は水のように、正義は尽きない川のように流れると告げた。
オバデヤ――エドムの滅亡を語った預言者。無慈悲残酷この上ないユダの敵の滅亡を預言した。
ヨナ――宣教師であった預言者。世にも不思議な、辛い事を経験して、それによって、神はイスラエルを愛されたのと同じように異邦人をも愛されるということを知った預言者である。
ミカ――民の友。支配階級の不品行を責めた。
ナホム――ニネベの滅亡を語った預言者。イスラエルの残虐窮まりない圧迫者、アッスリヤが滅ぼされることを知らせた。
ハバクク――困って途方にくれた預言者。民は乱れてよこしまなのに、どうして神はこれを罰したまわないのかと、み心のうちをはかりかねた。神は、その審判の手段として悪い国民、カルデヤびとを用いると答えられたが、その答えによって一層思い乱れた。そうして、「義人は信仰によって生きる」という原則の上に立って、その疑問を打ち消した。
ゼパニヤ――ヨシヤの世の信仰復興の預言者。その激しい非難の言葉はユダを悔い改めに導く力となった。
ハガイ、ゼカリヤ――神殿を建てた預言者。神からの力強い言葉で民の無関心を捨てさせ、恐れを除き、神殿完成へとふるい立たせた。
マラキ――旧約聖書の最後に出てくる預言者。したがって、旧約聖書を説く者として、最後の人

に当たる。モーセの律法を覚えよと叫び、救世主の先駆けとしてエリヤが来ると最後の預言をした。

第七章「トンネル」時代

第四章の終りのところで、マラキを最後に預言者は絶え、キリスト降誕まで、暗い「トンネル」の中へとはいって行くということを言っておいた。ユダヤ人の歴史のこの部分はクリスチャンの立場からは大体無視されてしまうのが普通であるから、ちょっとここに、この「トンネル」時代に、神に選ばれたこの民がどのような道をたどったかということを書いておく方がよいと思う。

「トンネル」時代における神と神の民との関係を知るには、エステル記がひとつの手がかりとなる。エステル記は変わった書き方がしてあって、ユダヤ人がアハシュエロスの残忍な手から救い出された記事のうちに、神のみ名がひとつも記されていない。み名は記されていないが、しかし、そこに神のみ手の動きを明らかに知ることができる。神は今日歴史の表面から隠れてはいるが、なおその民と共におられ、国家も個人もそのみ手のうちにおき、御自分の民をひそかに見守っておられるのである。イスラエルがエジプトを出るとき、神は神のみ力をあれこれとあからさまに現わして、その国を救い出された。しかし、エステル記では、神はひそかに隠れて、自然の道を通し人間を用いて、その働きを行なわれた。このような関係がこの四百年の間、神とユダヤ人との間にあった。そうして、その四百年の間には、あからさまな現われはひとつもなかったの

である。

しかし、民は全く光なしにこの暗い「トンネル」にはいったというわけではない。そこにはふたつの光があった。そのひとつは当時の現在を照らす光、モーセの律法であった。もうひとつは未来を照らす光、エリヤを先駆けとして来られる救世主への望みであった(マラキ四・四―六)。

ペルシャ時代(紀元前五三八年から三三三年まで)

バビロンはペルシャ王クロスに降伏し、ユダヤ人はその捕囚から免れた。神はクロスを用いてイスラエルを故郷に回復させられた。ペルシャのもとで、ユダヤ人は平和に暮した。バビロンから帰還したユダヤ人はバビロンの文化に染まり、教養のある民として、神のみ言葉を文字で書き表わし、それを写し、広めることができるようになっていた。この任務は律法学者という特殊の人々に任せられたが、聖書に出てくる最初の律法学者はエズラである。神の霊感という生きた水の泉は止まってしまったので、律法学者の仕事は、遠くにある貯水池から人々の手もとへと水を運ぶ導管のようなものとなった。それが後には聖書の解説者となったのであるが、そうは言っても、その解説は特に神の感動によるものではなかった。ただ言い伝えに頼ったので、それはゆがめられたものであった(マタ七・二九、一五・一―九)。

律法学者とみ言葉との関係は、冬と種の関係のようなものであった。それはしっかりと地中に

抱かれて春のくるのを待っていた。霊の面を取り上げると、この時代は腐敗した祭司に導かれていた時代で、礼拝は形式に流れていた。そうして、国民全体が誇りたかぶるようになり、異邦人の国々を軽蔑し始めてくる時代である。

ギリシヤ時代（紀元前三三三年から一六七年まで）

マケドニヤ王アレキサンダー大帝は世界を征服して一大帝国の建設者となった。大帝はその行く先々にギリシヤ文化とギリシヤ語とを広めたので、この世界語を提供することによって、キリスト教が伝えられる道が備えられた。大帝はまたユダヤ人を暖かく待遇し、大帝がエジプトに建設した都会、アレキサンドリヤに住むことを勧めた。このアレキサンドリヤは、その後ユダヤ人文化と異邦人文化の一大中心地となり、ユダヤの学者も異邦の学者もここでお互いにその知識思想の交換を行った。こうしてエジプトにいる間に、ユダヤ人はその聖書をギリシヤ語に翻訳し始めた。ギリシヤ語はその当時の世界のほとんどいたる所で使われていたので、異邦人は神のみ言葉を学ぶ機会をもつようになったのである。

ギリシヤの思想、習慣、言葉がユダヤ人に取り入れられていった。ユダヤ人はギリシヤ名前を使い、ギリシヤ競技に参加し、ギリシヤ哲学を学んだ。主の民は、これといって捕えることはできないが、巧妙な危険にさらされていた。人間を高くし、罪を極端に軽くみるギリシヤ文化

はユダヤの国民性に影響を及ぼした。それはやがて、ユダヤ国粋の息の根を止めるに至った。そして、妥協と世的な事とが横行した。

このような有様の時、ユダヤ人のうちに二つの派が起こった。その一つは大衆の「ホーリネス運動」であって、これは厳しい態度で異邦人、異邦人文化から離れ去ろうという派であった。その目的は、異邦人の攻撃の的でもあり、また、ユダヤの妥協派が無意味なものにしてしまおうとしているモーセの律法を、どこまでも守り抜こうというところにあった。もう一つは祭司や身分の高い人たちの集まりであって、これは世的な教会を代表していた。その目的は、異教の隣人の気にいらない習慣はなんでもかんでも取り除いて、ユダヤ人だとか異邦人だとかいう区別をぼかしてしまおうというところにあった。前のものは異邦人を隔てる**堀**を掘り、後のものは異邦人を招く**橋**を作った。そうして、堀を掘ったものは主の律法を心から愛する燃えるような愛国者の集団であり、橋をかけたものは主義主張も信仰もない、この世の名誉や利益を追い求める、生ぬるい人々の集まりであった。これらが後に、一つは**パリサイ人**となり、一つは**サドカイ人**と言われるようになるのである。

アンチオカス王時代の迫害と独立戦争（紀元前一六六年から一六三年まで）

このような腐敗の中から救い出されるために、きびしい迫害が襲ってきた。ユダヤ人にとって、

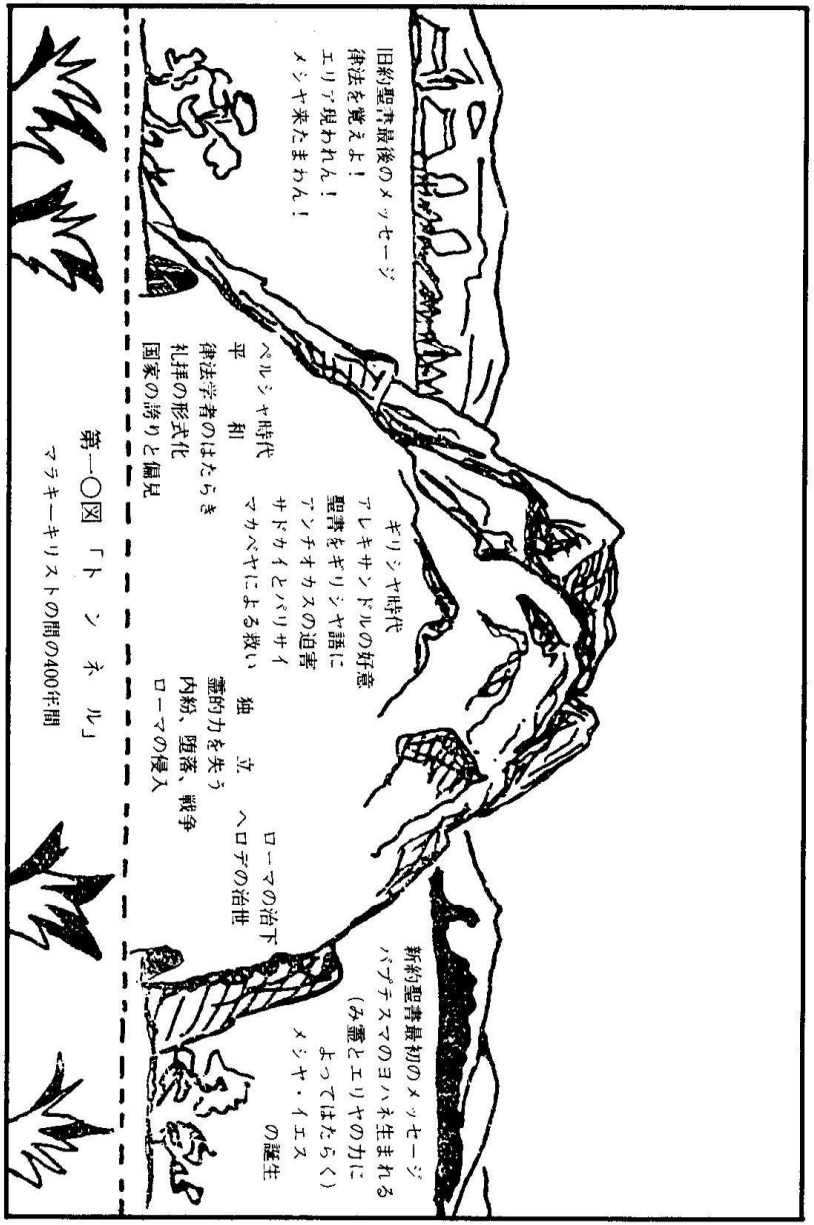
異邦人の友情は大してためにならなかった。むしろ、その敵意の方が身のためになった。

シリヤの王アンチオカス・エピファネスはその性質に善悪二つを兼ね備えていた。王はエルサレムに起こった反逆を鎮めたが、しかし、そのあとで今度はユダヤ人の宗教をつぶそうという考えになった。ユダヤ人の宗教をつぶし、ユダヤの国民精神を破壊して、次に起こる騒動を防ごうと考えた。王は悪魔にでもそそのかされたかのようにユダヤの神殿の祭壇に豚をささげてこれを汚し、聖書の写本は見つけ次第めちゃめちゃにするよう命じ、また、ユダヤ人を召し集めて異教の祭壇の前で礼拝するようにと強要し、もしそむく者があれば厳罰に処すると言って脅かした。その結果主にそむく者も沢山出たが、また一方には、進んで苦しみを受け、信仰のために死んでいく者も大勢出た。イスラエルの神はむなしくその民を教え導いておられたのではなかった。

時がきて、祭司マタテヤの扇動によってユダヤ人は反抗した。マタテヤの子ユダ・マカベヤがユダヤを指揮し、信仰復興の「ハンマー」は振り上げられてシリヤ軍は敗退した。そうして、ここにユダヤは独立を獲得したのである。大いなる喜びのうちに神殿は清められ、昔のままの礼拝は復活した。それから後、ユダヤ人はこの救いを宮清めの祭として祝うようになった。

マカベヤ族の統治（紀元前一六二年から四〇年まで）

その後イスラエルは、しばらくの間、マタテヤの子孫によって治められた。これは祭司であり、



王であった。このようにして政治的には国の自由を得たが、しかし、間もなくユダヤ国民は、その霊的な力を失ってしまった。マカベヤ族の治世は、内紛、内乱、跡を絶たず、神殿は不純なものとなり、パリサイ人の攻撃の的となった。そのうちに、王家のうちに争いごとが起こり、その争いをローマに訴え出た。この訴えはローマにくさびを打ち込ませたのも同然であった。ローマは武力によって国内に侵入し、紀元前六三年、パレスチナを占領した。後に、ローマは、ユダヤ人とエドム人の混血児であるヘロデ大王を王座にすえた。その政治下にユダヤ人のまことの王、救世主、イエス・キリストがお生まれになったのである。

第八章　あがないの顕現

（四福音書）

旧約聖書で、わたくしたちは、あがないの準備が整えられたことを知った。新約聖書では、

あがないの顕現　＝　四福音書
あがないの真理の宣伝（のべつたえ）　＝　使徒行伝
あがないの真理の説明　＝　手紙
あがないの計画の完成　＝　黙示録

というふうに調べていくことにしよう。

世界のすべては全福音のためである

あがない主のことは歴史の明け方からの約束であった。それはモーセの与えた儀式、典礼のいろいろなひな型の中で前もって知らされ、詩篇の作者によって歌われ、預言者によって告げられてきた。そうして、「時の満ちるに及んで」送り遣わされてこられたのである（ガラ四・四）。時の満ちるに及んだとき、それは世界があがない主を必要とし、あがない主の受け入れ態勢が各方

面に整えられたときであった。福音を植えつけられた神は、土をほぐしてそのために備えられたその神である。神はそのあがないの計画のうちに、ユダヤ人をユダヤ人の役割のために訓練されたのであるが、同時にまた、歴史を見れば、異邦人にもこのよき知らせを受け入れさせようと、その準備のために働らかれたことがわかる。イエスが来られたとき、世界はその受け入れの準備が整っていた。それは次の事柄から明らかにすることができる。

世界は一大統一帝国になっていた

ローマ人は幾度かの戦争に勝って、当時の世界を結合して一つの国とした。そこでは広い範囲にわたって、法律も命令も一つの国として同じ力を持ち、各都市は立派な道路で連絡していた。このような状態であったから、福音の説教者は一国から他国へ急速に移動することができた。

世界は平和であった

それまでの社会不安や戦乱は、キリスト教の最初の種まきのためには妨害となったに違いない。

世界語が使われていた

ローマ帝国全土にわたってギリシヤ語が使われていた。ギリシヤ語は最も完全な言葉の一つである。福音は最も完全なこの世界語で説かれ、また、書かれたので、帝国内のあらゆるところでだれにも理解してもらえた。

世界は何ものかを求めていた

あるローマ人は「腐敗しつつあり、また腐敗している、それが今日(こんにち)の精神である」と、その著作のうちに書いている。一般国民は、光となり導きとなる神の真理にあこがれ、罪から救ってくれる神の力を待ち望んでいた。

世界は待望していた

ユダヤ人は、偉大なる主の来られることを待望し、行く先々でこの話をした。それがあちらでもこちらでもこの世の希望となった。東方諸国では、世界を治める王がユダヤに生まれるということが広く考えられていた。

福音のすべては全世界のためである

福音は福音書の書かれる以前から説かれていた。キリストを信じるために味わう体験はキリスト教の聖書よりも先にあったのである。幾年月かの間、福音は使徒と呼ばれる人々の口で語られ、人々はこれを耳で聞いていた。使徒というのは特に主イエスの指名した人々で、使徒たちと一緒にガリラヤの道を歩まれたイエスは、あのよみがえられたイエスと同じであり、今は聖霊によって使徒たちの心のうちに、命のうちに住んでおられるということをあかししたのである（ヨハ一五・二七、使徒一・二一、二二）。

使徒たちはあかしをしただけではなく、あかしをするに当たっては、聖霊が思い出させて下さ

るのに応じてイエスのなされた事、言われた事を教えたのである(ヨハ一四・二六)。こうしてあかしは語られたが、それは使徒たちと同じ時代の人々にしか伝わらない。そこで、キリストの一生、キリストの教えを書きとめておかなければならなくなった。そうして、その後に来る時代の人々が、命の言葉を目で見、耳で聞き、手でさわった人々と同じ交わりにあずかることができるようにしたのである(ヨハⅠ一・一―三)。この必要に応じるために、主は霊感を与えて、主の一生についての記録四つを書かせられた。マルコとルカとは使徒ではなかった。しかし、二人が使徒同様の権威をもってその福音書を書いたことはマルコによる福音書を読み、ルカによる福音書を読むとき、だれでもよくわかることである。

福音書は、なぜ四福音書の形をとったのであろうか、福音書を研究し、福音書が書かれた時代の人々のことをしらべると、この問いの答は自然に出てくる。福音書のメッセージは一つ一つ、あらゆる時代、あらゆる階級、あらゆる国民のためのものであることは言うまでもないが、それが書かれた当時、そこには大きく分けて四つの社会的区分があったので、特にその一つ一つの必要に合わせるために**四福音書**の形をとったのである。四つの社会的区分、それはユダヤ人、ローマ人、ギリシヤ人、クリスチャンである。

ユダヤ人――これは宗教の民であり、預言の人であって、旧約聖書に約束されたあがない主を待ち望んでいた。このような人々のために、マタイはその福音書を書き、ナザレのイエスこそ、

モーセの語り、預言者の語ったそのあながい主であり、イスラエルの栄光、異邦人の光であるということを証明した。

ローマ人――これは統治者であり征服者であって、大将軍、勝利者を理想の人として考えていた。マルコはこのようなローマ人に向けて、その福音で、イエスこそ力ある大勝利者であって、人間のまことの敵、罪と病気とを打ち滅ぼし、死なれることによって人間の心に霊の国を打ち建てられると書いたのである。

ギリシヤ人――これは教養、文化の人であって、人間を道徳的、知能的、体育的に発達させることを目的と考え、完全な人間というものを理想としていた。ルカによる福音書はこのような人のために、イエスこそは完全な神の人であって、人間が神の性質を持つものとなるために、神でありながら人の性質を持つものとなって御自身を現わされた方であると説いている。

クリスチャン――これは信仰の人であり、あらゆる国の人によって組織された教会という新しく生まれた国に属する人である。前に書いた三福音書は**宣教のための福音書**として書かれたものであるから、これは特に語られたメッセージの根本的なところから始められていると考えなければならない。

使徒行伝一〇・三六―四三のペテロの説教を読むと、マルコによる福音書の骨組みがわかる。㈠バプテスマのヨハネの働き(三六、三七節)　㈡イエスの御働き(三八)　㈢イエ

スの十字架（三九）　㈣イエスのよみがえり（四〇）　㈤イエス弟子たちに現われたもう（四一）　㈥大いなる命令（四二、四三）

根本的本質的なことが説かれた結果、教会ができていったが、その後、イエスが神であられるということや聖霊の約束というようなことについて、更に深いイエスの教えに触れたいという要求が起こってきた。そこで、ヨハネは教えの福音書を書いて、イエスは神の永遠のみ子としてつかわされたと記し、言葉が肉体となったと言った。

福音書のキリストは全世界のためのキリストである

ここでちょっと、自分が宣教師になって、イエスのことなど、これまでついぞ一言も聞いたことのない民族のところへたどり着いたと考えてみよう。ほかにも求めている所はあちらにもこちらにもあるので今回は短時間しかとどまることができない。しかし、その民族は自分たちか、だれかほかの宣教師がまだ来ないうちに滅びないとも限らない。そのとき、この民族が救いを信じることができるようにと話しておかなければならないと考える。そんなときに、どのようにして話したものであろうか。参考のために、次のような事を書いておこう。

三十年間待つ

イエスの先駆けとして生まれたバプテスマのヨハネは、父のザカリヤが聖所で祭司の務めをしている時にみ使いによってその誕生を知らされた。その同じみ使いがイエスの両親に、それぞれ時を違えて現われ、神のみ霊によって超自然的に生まれる一人の子が与えられ、その子はその民をもろもろの罪から救う者となるからイエスと名づけよと告げられた。この時、イエスの父母はまだ婚約中で一緒になったことがなかったから、二人は驚き迷った。

やがて人々の大いなる羊飼いとなられるこの幼子を見て喜ぶために、まず訪ねて来たのは、いやしい羊飼いたちであった。それから、イエスが初めて宮に伴われたとき、あがない主が来られるのを待ち望む年老いた聖者が二人、イエスを見て、イスラエルの栄光となり、異邦人の光となると言った。異邦人の代表として東から来た博士たちは、幼子を見、ひれ伏して拝み、贈り物をささげた。それは丁度時期がきて、世界の国々がその王としてのイエスのみ前にひれ伏すありさまを現わしていた。

この時、人間の敵もぼんやりしてはいなかった。処女から生まれたこの幼子を殺そうという企てが無情な王ヘロデによって仕組まれた。しかし、それはくじかれた。この幼子はヘロデの手を逃れて異邦人の国エジプトに連れ去られ、やがてまた、卑しいガリラヤの町へと移され、イエスはそこですごされた。その少年時代についてはたった一つだけ、十二才のときに御自分が神の子であることを知り、大いなるわざのために神に召されたということを知っておられた、ということが記されている。その後十八年というものは、何もわかっていない。

小さな始まりの年

時がきて、イエスはその仕事についての神の按手礼を受け、公然と立たれた。イエスはナザレをうしろにして、従兄のヨハネが、大いなる王が来られる、道を備えよと教え、人々にバプテスマを施している所へ行かれた。罪なき者、イエスが、ヨハネのバプテスマを受けられた時、御自分の上に奉仕に必要な神のみ霊の油注ぎがなされ、天からこれを力づける父のみ声を聞かれた。

神のみ霊を受けたイエスはその力をどのような目的のために、どのように用いられなければならなかったのであろうか。この問題を決めるために、イエスはみ霊によって荒野に導かれた。荒野で、イエスは敵の罪に満ちた試みと争い、この力を苦しみに沈んでいる人間の救いのために用いようと決心された。決してご自身のためではない。しかも、それは世的な、政治的な方法によってではない。ただ霊的な方法でこれを行なうことにされた。神の国を作るに当たって、剣の力によらず、その十字架の愛の力によろうと定められたのである。

このようにして、イエスはその務めを始められたが、そのとき、その務めを助ける者として、身分もない卑しい漁師たちを選ばれた。務めの第一年のこの年、イエスは初めてその力あるわざを行なわれた。御自分の父の家、エルサレムの神殿から、はとを売る者、両替えをする者を追い出し、ユダヤ人の指導者で、救いの道を求めているニコデモと重要な会見をなされた。

名の知られた年、群衆集まる

ヨルダンの川でイエスが油そそぎを受けたことの結果はたちまち現われた。イエスが、病気、罪、死、悪魔、自然などの上にそのみ力を現わされ、当時の律法学者たちのようにではなく、権威をもって教え説かれるにつれて、教えを受け、いやしを受けたい、という人々が大勢全国から続々と集まってきた。やがて、イエスはそのあがないの死の後、その教え、その救いのよきおとずれを広めるために全世界に向けて大活動が行なわれなければならないことを知り、十二人の弟子を選ばれた。これが使徒である。使徒はこの全世界救霊の最初の指導者となる目的で、特別の訓練を受けた。イエスはまた、十二使徒以外にも、その働きを助ける人々をも選ばれた。

反対に会われた年、群衆散る

純潔、真理、善、自己犠牲、これがイエスの教えであり、行なわれた事はすべてそのうちにあった。これが人間に根ざす罪、高慢、利己心、無知からくる対立を呼び起こすに至った。まず、パリサイ人が反対の火の手をあげた。パリサイ人は自らを正しいとしている宗教団体であったが、イエスはその形式主義と偽善とを攻撃し、また、パリサイ人は、イエスが最も罪深く最も堕落した人々と一緒にいたというので非難した。次に、サドカイ人であるが、これは政治的結社であった。イエスの名声があがるにつれて、民を反逆に駆り立て、せっかくローマ帝国の下に与えられていた少しばかりの自由までローマの手に奪われてしまわないかと恐れたのである。ところで、

一般国民はどうであったかというと、それはイエスを大預言者としては認めていたが、約束された王、あがない主としては受け入れていなかった。国民の望んでいるものは武力による地上の新国家の建設であった。しかし、イエスの教えられたものは人々の心のうちに作られる霊の国であったからである。この点では、親兄弟もイエスを理解することができなかった。そのうちに、五千人を五つのパンと二匹の魚とで養うという奇跡が起こって、イエスの名声は絶頂に達した。しかし、このときにもイエスは群衆の求める王として立ちたまわず、かえって、イエスは、人に命を与えるために死ぬ目的で来られたということを説いて人々を驚かされた。その結果、つき従う者の大部分はイエスを離れ去った。ペテロが、イエスは救い主であり、神の子であると告白した後、主は弟子たちにやがて来るお苦しみと逝去とを明らかにされた。この新しい、人々の希望を奪う啓示をあらわに語った後、イエスは二、三人の弟子に来たるべき主の栄光のしるしとして、栄光を受けた御自分の姿を見せ、励ましを与えられた。イエスは一人の人を死からよみがえらせた。そのために、イエスの名は一時エルサレムで高くなった。それで、いよいよ議会の指導者たちはイエスを殺すことにきめたのである。

十字架と冠

人々から拒否されながらも、イエスは御自分をこの民に与え、勝利のエルサレム入城をされた。時の近づくのを知っておられるイエスは、弟子たちと最後の晩餐をとり、別れの説教をして、ゲ

ッセマネの園へ行き、そこで、父のみ心のままにと、血の汗を流して苦しい祈りをされた。イエスは、このゲッセマネの園で捕えられ、ユダヤ人の議会とローマの総督の前で裁判を受け、神を汚す者、律法を破る者として十字架の死刑を言い渡された。このようにして、イエスは十字架の上で死に、葬られた。しかし、その墓はこの命の君、イエスを閉じこめておくことはできなかった。三日目によみがえり、多くの弟子たちに現われ、み霊の力を受けてイエスのあがないについての喜ばしい知らせを全世界に伝えよと命じられたのである。

このような話をして聞かせると、「そんなことが一体このわたしとどういう関係があるのか」と言う人があるに違いない。そんな時には、自信と喜びとをもって、次のように答えればよいのである。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それはみ子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

イエスの一生

準備のための三十年間

予告、預言

イエスの誕生

幼子イエス、ユダヤ人と異邦人とに拝される。
幼子イエス、宗教の指導者に無視され、王に脅かされる。
エジプトに逃れる。ナザレで成人を迎える。
世に隠れ、小さな始まり
イエスのバプテスマ。荒野の誘惑。最初の弟子。
最初の力あるわざ。宮清め。ニコデモとの会見。
名の知られた年、群衆集まる
イエス、説き、教え、いやしを行なう。病気、罪、死、悪魔、自然に対してみ力を現わす。
十二使徒を選ばれる。
反対に会われた年、群衆散る
イエス、パリサイ人、サドカイ人の反対に会う。
人々にも親兄弟にも理解されない。
五千人を養う——名声絶頂に達する。
命のパンの教え——名声落ちる。
ペテロの言葉。やがてくる逝去を告げる。
イエスの姿変わり。来たるべき栄光のしるし。

ユダヤ人の議会、イエスに死刑を言い渡す。
十字架と冠
勝利のエルサレム入城——「見よ、あなたの王を」
最後の晩餐——「わたしは去ってゆく」
ゲッセマネ——「みこころが行われますように」
裏切りと逮捕。
裁判され、刑を受ける。
十字架につけられる——「すべてが終った」
よみがえられる——「イエスはよみがえった」
天にあげられる——「わたしは天にあげられ……待ちなさい……あなたがたは行きなさい」

第九章　福音（よろこびのしらせ）広められる

（使徒行伝）

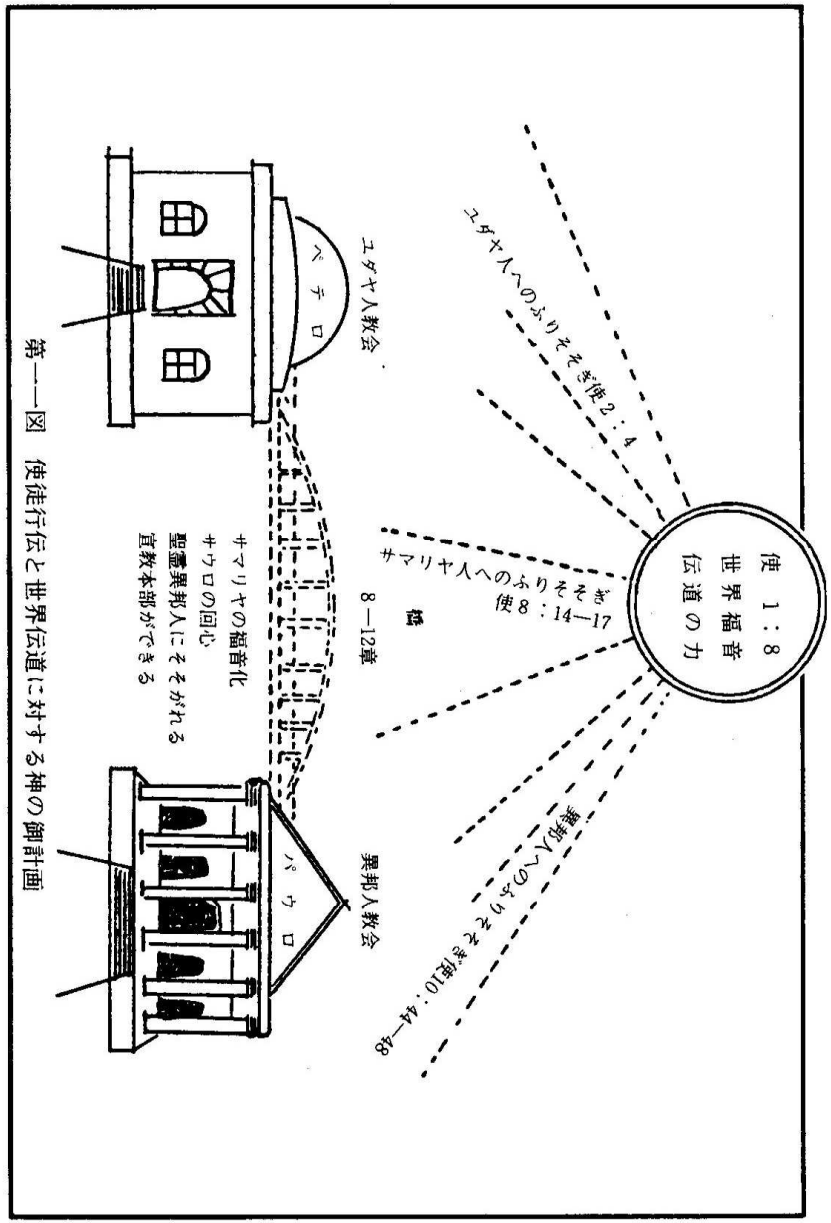
使徒行伝には教会の建設とその成長についての歴史が書かれている。そして、どのようにキリストの御命令に従い、み霊の力によって、その喜びの知らせが全世界の国々に宣べ伝えられたかということが記されている。使徒行伝は三つに分けて考えることができるが、それがそのままここのメッセージの要点でもある。

キリストの昇天＝世界伝道の準備ができる。

聖霊の降臨＝世界伝道の力が与えられる。

福音の伸展＝世界伝道の効果があがる。

使徒行伝を気をつけて読むと、二人の人物がいて、その二人を中心にして話が進められていることに気がつく。ペテロはユダヤ人に対する使徒で、パウロは異邦人に対する使徒である。ここに、使徒行伝を書いた人の目的の一つがあったように思われる。それは長い間離れ離れのものであったユダヤ人と異邦人とが、どのようにしてキリストにあって一つのからだになったかということを説明しようとしているのである。



第一一図　使徒行伝と世界伝道に対する神の御計画

次に使徒行伝の構想を知るために第一一図を掲げる。図の上の方にある円は使徒行伝のテーマを表わす鍵の言葉、使徒一・八「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」である。円から出ている点線は三つの代表的な聖霊のふり注ぎである。それがユダヤ人、サマリヤ人、異邦人と伝道の三方面にわたっていることを示す。

この図を頭にいれておいて、これから使徒行伝の研究に取りかかることにしよう。

ユダヤ人の教会ができる（第一章から第七章まで）

図にはこれをユダヤの会堂の形で描いておいた。事件は次の通りである。

第一章はただ前置きである。話は五旬節の日の来たことから始められている。突然激しい風が吹いてきたような音が起こり、火の舌のようなものが現われ、不思議な力で与えられた言葉によって福音を語った。このようにして、**教会**は全世界に対する教会の務めのために、油を注がれたのである。霊的に作られた最初の教会の、最初の日の、最初の説教者の、最初の説教で三千人という人々が回心した。

初めの頃のクリスチャンは、献身をし、喜んでいる人々の集まりであった。そして彼らの一致は非常に強く、あまり長くは続かなかったが一つの理想的生活を始めて、信者たちは皆一緒に

いて一切の物を共有にしたほどである。その団結を危くするようなことがあると、愛と同情と協力とをもってその困難に打ち勝った。たとえば、ギリシヤ語を使うユダヤ人のやもめらがおろそかにされたときのようにである。その交わり、その実生活、奇跡の働き、そういうものを見て、教会に加入する者が多かった。当時、教会に加入してくる人々は、大抵まじめで純真であった。それは、アナニヤとサッピラとの死によって、教会というところは神聖なところで、偽善はすぐにあばかれて罰せられるということが広く知らされていたからである。このような教会に対して、ユダヤの従来の宗教指導者たちが、この喜びの知らせの広がるのを何とかして防ごうとしたことは考えられるし、また無理もない。しかし、彼らは福音の火を消し止めるためには全く力がなかった。

そのころは、まだ、教会はユダヤ人の団体組織であるにすぎなかった。したがって、会員は、福音は全世界を包む真理であり、神の古い御計画はすでに過去のものとなってしまっている、ということを完全につかんではいなかった。信仰と聖霊に満ちた七人のうちの一人、ステパノは、大きな幻を描いていて、公然と大胆にモーセの契約は無効になったと説いて歩いた。ステパノは知恵とみ霊とで語っていたので、ユダヤ人のうちでもそれを信じない人々は、その知恵に対抗することができず、ただむちゃくちゃに反対していった。そうして、裁判の席に引き立てて侮辱したあげく、ステパノを神を汚す者として処刑した。天からの光でその顔は輝き、そのくちびるで

は迫害を加える人々のための祈りを唱えつつ、この教会の最初の殉教者は永遠の報いを受けに天に帰って行った。この死刑執行の人々の中に、パリサイ人サウロという者がいた。このサウロは後に使徒パウロとなり、やがて、ステパノの跡を継いで、異邦人の間を説いて歩くようになった。

移り変わりの時代（第八章から第一二章まで）

ユダヤ人と異邦人は一つのからだであるべきだということは、初めは理解しにくい奥義であった（エペ三・四―六）。その奥義が明白な啓示となって現われた。使徒行伝第一〇章を読むと、神はペテロとコルネリオをどのように扱かわれたかということがわかる。この問題については激しい紛糾、論争が起こった。使徒行伝第一五章には、パウロとユダヤ人の律法主義者とが対立したことが書いてある。しかし、いろいろな事があって、ついに、それはだれにも理解されるようになったのである（コリI一二・一三、エペ二・一一―一八）。

図に点線で書かれた橋は、福音がユダヤ人の教会から異邦人の世界へ伝わっていったことを表わし、そこに世界の教会異邦人支部ができたことを示す。その後の言葉は、人種を問わずあらゆる国々に福音の輪が広げられていく段階を示している。

ステパノの言行は相当の影響を残した。ステパノと共に選ばれた七人のうちの一人、ピリポはユダヤ人の狭い仲間から去って、ユダヤ人から見下げられているサマリヤ人に福音を宣べ伝えに

出ていった。ピリポはキリストを説いた。すると、しるしが現われ、リバイバルが起こり、サマリヤ人たちは非常に喜こんだ。このようにして、福音伝道の範囲は広められていった。

サウロはユダヤ教に属し、パリサイ人としてキリスト教の熱心な敵であった。サウロはクリスチャンを迫害する目的で、ダマスコへと出かけていった。この時サウロは目のかたきにして叩きつぶしてしまおうと思っているキリスト教の説教者になろうなどとは夢にも考えていなかった。ただサウロの目の底にはステパノを石で打ち殺した時の有様が残っていただけである。しかし、サウロの胸に何かしら疑いの影がさしてきた。苦しさが心を攻めてきた。良心のささやきが聞こえ始めた。しかし、サウロは懸命にとげのあるむちをけとばし続けていた。しかし、心の戦いは、長くは続かなかった。突然、目もくらむばかりの光がさして、栄光の光と天からの声が落ちてきた。このようにして、倒れた時は**パリサイ人・サウロであった者が**、立ち上がった時には**使徒パウロ**になっていたのである！　神は危険な迫害者を異邦人に対する伝道者に変えられたのである。

異邦人伝道の神の御計画は更に進められた。**異邦人コルネリオ**はカイザリヤで絶えず神に祈っていた。すると、ある時、幻を見て救いの約束を与えられた。一方、**ユダヤ人ペテロ**はヨッパで祈っていた。するとペテロも幻を見た。しかし、ペテロにはその意味がわからなかった。その後間もなく、このユダヤ人ペテロは異邦人コルネリオと会うことになるのであるが、会ってみて初

めてその意味がペテロに解けた。ペテロはコルネリオの家に集まった人々に説教した。聞く者の心は信仰によって清められ、み霊の賜物を受けた。ペテロと、ペテロと一緒に行った人々は、このようにして、神は異邦人をも受け入れ、ユダヤ人と同じ立場におかれたことを知った。

異邦人伝道の準備については、もう一つ書いてある。サウロの迫害を受けてエルサレムを追われた人々はアンテオケまでも進んで行ったが、そこであかしをしたので、その結果一つの教会ができた。このようにしてできたアンテオケの教会は「外国伝道本部」になった。この「本部」から使徒パウロは宣教師として派遣されたのであるが、こうして福音は「地のはて」にまで宣べ伝えられる準備が整えられたのである。

異邦人の教会ができる（第一三章から第二八章まで）

第一一図では異邦人の教会を、ギリシヤの神殿で示しておいた。第一三章から第二八章にかけては、キリスト教の最初の宣教師、典型的な宣教師パウロの身辺に重点がおかれている。パウロは伝道のためにアジアと言わず、ヨーロッパと言わず旅して、異邦人の教会を作るために努力した。そこにはいろいろの苦心談がある。その苦心談をたどると、世界に対する神の大いなる御計画に従って、パウロがどのように働いたかということを知ることができる。

パウロは自分が世界伝道の器（うつわ）として神にその使命を負わされたということを知っていて、それ

をあかしして歩いた（使徒九・一五、ガラ一・一五、一六）。パウロの働きの目的はすべてアブラハムの受けた祝福が異邦人に及ぶためであり、異邦人が約束のみ霊をその信仰によって受けるためであった（ガラ三・一四）。

パウロは説教をするとき、福音を聖書にあるあがないの計画に結びつけて語った。パウロはそのメッセージを最初のあながいの約束に結びつけ（ガラ四・四、創三・一五）、アブラハムとの約束に結びつけ（ガラ三・六―一六）、モーセの律法に結びつけ（使徒二六・二二）、ダビデとの間に行なわれた約束に結びつけ（使徒一三・二三、二三）、また、預言者の言葉に結びつけた（使徒一三・二七）。

パウロは、全世界への幻に生きた人で、その抱負はキリスト教をその生まれたところに閉じこめようとせず、広く世界に向けて送り出そうというところにあった。すなわち、パウロの目標は「あなたがたを越えたさきざきにまで、福音を宣べ伝え」（コリⅡ一〇・一六）ることであったのである。そうして、それを宣べ伝える方法にも、パウロにはパウロ独自の原則があって、決して他人の作った土台などを利用しようとはしないで（ロマ一五・二〇）、新しい土地を開拓して、新しい教会を建てていった。

パウロは、福音伝道の行く手に横たわる危険を防ぐ、神のみ手のうちの緩衝器であった。その危険はユダヤ人の**排外思想**にあった。それはキリスト教をユダヤ教の一派にしてしまおうとして

いた。そうして、ユダヤの**律法尊重主義**はユダヤ教の儀式の重苦しい衣で、生まれたばかりの異邦人の教会の息の根を止めようとしていた。使徒行伝第一五章は、この意味で、一つの関ヶ原であった。それは、ユダヤから下って来たある教師たちが、救われるためにはモーセの律法を守らなければならないと異邦人に強制していたからである。この問題について、少なからぬ紛糾と争論とが起こったが、その時、エルサレムにそのための会議が開かれ、問題は大きく取り上げられた。パウロは異邦人の自由のために戦って妥協しなかった(ガラ二・一―五)。そうして、その会議の席で、パウロは、異邦人たちはモーセの律法を守ってはいなかったが、その異邦人の上に神は数々のみわざをなされたということを説明した(使徒一五・一二)。パウロの異邦人に対する考え方にはペテロも同じ意見であった(使徒一五・七―一一)。その結果、パウロは異邦人の自由を勝ち取ったのである。

第一〇章　あがないの真理の説明

（手　紙）

福音書は、あがないの教理の根本をなす事実を示している。使徒行伝はその事実を宣べ伝えることによって教会が作られたことを教えてくれる。教会ができることによって、福音を解釈する必要が生じてきた。十字架の力を心に感じた者たちは、更に進んでその意味を知り、それを日常生活の中に取り入れたいと思うようになった。人々は迫ってきている神の怒りから救われた。こんどは、現に今のこの生活のうちに、どのような標準を求めたらよいのか、それを教えられなければならなくなった。その必要に応じて、手紙が書かれたのである。

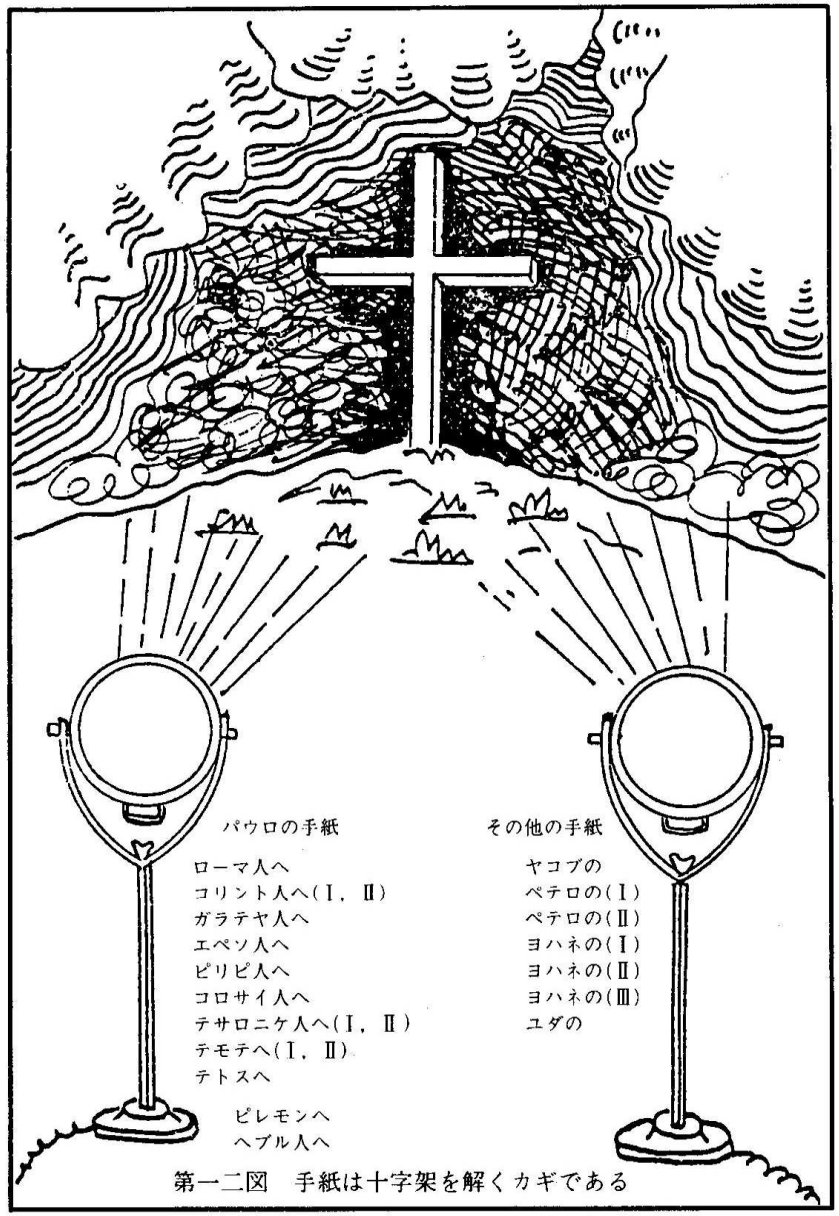
次に、手紙にはどのようなことが書かれているか、そのあらましを記してみよう。

手紙を福音書と比べてみると、福音書は十字架の処刑の**話**である。それに対して、手紙はその物語の**解釈**であり、その物語の中心人物、キリストの**解釈**である。手紙は、罪に汚れきった人々がどのようにして、キリストのあがないのみわざを通して神と正しい関係に置かれるかということを説明している。また、どのようにして信仰を通し、神のみ力によって、罪人たちがとがから救われ、罪の力から救い出されるかということを説いている。

福音書には、イエスの清い御性質が書かれ、そのみ足のあとに従うことをすすめるイエスの教えが記されている。これに対し、手紙には、罪を赦された人々がどのようにして、その救い主キリストのような性質になることができるか、――**聖徒**はどのようにして**清く**なることができるか、ということが説かれている。手紙は、信じる者に、神の恵みによって「以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て」、「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着る」ことができると請け合っている。手紙はまた、み霊のうちを歩む者はみ霊の実が現われ、そのみ霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であると言っているのである。

手紙はイエスの教えの性質を映し出している。それゆえ、それは霊的に深いと同時に非常に実際的である。手紙を見ると、そこには、信者はその信仰や霊性をどのようにして毎日の仕事、任務、問題に応用していったらよいかということが書かれているのがわかる。すなわち、教会、国家、社会、仕事などの関係について、信者はどのようにしてキリスト教徒であるということを表わしていったらよいかということが記されているのである。手紙は、神に近づき、霊的生命に必要なものを手に入れる方法として、信仰は唯一のものであると強調しているが、また一方では「信仰も……行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである」と強く言っている。

手紙には、キリストの教会の性質や務めに触れ、キリストの働き人の尊さや義務や責任などが



第一二図　手紙は十字架を解くカギである

説いてある。

「わたしは、あなたの所にすぐ行きたいと望みながら、この手紙を書いている。万一わたしが遅れる場合には、神の家でいかに生活すべきかを、あなたに知ってもらいたいからである。神の家というのは、生ける神の教会のことであって、それは真理の柱、真理の基礎なのである」と、テモテⅠ三・一四、一五に書いてある。

キリスト教が発足すると、もうその時から、真理の敵はにせ教師や間違った教理の毒麦をまいていた。キリスト教の教理に対する危険は、教会のうちにあるユダヤ人からも異邦人からも現われた。ユダヤ人の側の危険は**律法尊重主義**であった。それは救いと聖別とを受けるためには律法を守らなければならないという主張であった。(ガラテヤ人への手紙参照) 異邦人の方の危険は福音のもたらす自由というものを放縦とはき違えた**道徳的無秩序**であった。(ユダの手紙参照) 異邦人の危険はそれだけではなかった。そこには**異邦人の哲学**があった。その哲学は、キリスト教を美しいが力のない理論としてしまうものであった(コロ二・八)。

それゆえ手紙は、「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰のために戦う」ために書かれたものなのである。手紙はクリスチャンをその救いの完成——キリストの再臨——の望みの上に立たせ、この教理を教会に結びつけ、この世に結びつけ、その実行を、テトス二・一一—一三にあるように、

「すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている」と、強調しているのである。

第一章　計画の完成

（ヨハネの黙示録）

あがないの物語はぐるっと大きな円を描いて、その円は創世記で始まり、聖書の最後のヨハネの黙示録で完成する。今、最初の創世記と最後の黙示録とを比較してみると、そのことはよくわかる。

創世記	黙示録
楽園を失う	楽園を取り戻す
サタンがはいる	サタンが滅びる
のろいが始まる	のろいはもはや無い
初めて涙を流す	涙はことごとくぬぐわれる
闘争が始まる	最後の勝利を得る
神との交わりが絶える	完全な交わりにはいる
古い天地	新しい天地

黙示録の背景とその内容

新約聖書はキリスト教発足当時の人々の必要に即応するために書かれたものであるが、それは、それだけにとどまらず、その後のあらゆる時代の信者にメッセージを伝える目的で書かれたのである。そこで、それらの書物が書かれた時の歴史的背景を研究してかかるならば、そのメッセージは二千年の時間を超えて、現代のわたくしたちにもよくわかるようになっている。たとえば、ガラテヤ人への手紙であるが、ここでは、パウロの頃のガラテヤの教会にどのようなことが起こっていたか、キリスト教をユダヤ教化しようとする人たちのやり方や実際活動などを、知らないでそれを読んでも、ガラテヤ人への手紙のメッセージのもつ本当の力を理解することはできない。黙示録についても同じことが言える。黙示録のメッセージをかみしめて味わい、深く理解するには、初代教会がどのような立場に立たされ、どのような危険にさらされて、この霊感による黙示を必要としていたかということを知らなければならない。

これが書かれた当時は迫害の火の燃えさかっている時代であった(黙一・九)。その時、ローマ帝国は、全力をあげて、神の小さな群を目のかたきにしていた。キリスト教徒は偶像を拝むことを拒むので、無神論者と非難され、皇帝の像を拝むことを拒むので不忠の臣とののしられた。こうして、キリスト教は国家を脅やかすものと言われ、キリスト教を叩きつぶそうという徹底的な

政策がとられていた。

このような苦しみのうちから、いろいろな疑問が生じてきた。「この世の国がキリストの御国をこわしてしまうのであろうか？」「ローマ皇帝の方が、結局、キリストに勝つのであろうか？」これらの疑問に対して黙示録によって天の答えが与えられた。

それは、キリストのみ国はありとあらゆる反対を押しのけて最後の勝利を得ること、やがて時が満ちてキリストが再臨された時、反キリストの国（異教のローマはそのひとつの型にすぎない）は打ち滅ぼされると教えたのである。「見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかり、アーメン」（黙一・七）。

黙示録の性質

黙示録は**力の書**である――これを読むとき、聖徒たちは見えない世界の力を見ることを許され、天地の力はことごとくこの地上にみ国を定めるために神が用いられるという確信を抱かせられる。

黙示録は**み座の書**である――ここでは、天はまことの支配者であるということを教えられた大王のみ座を見ることができる。その他の数々の座が、この世で伸ばされるあらゆる誘惑の手に

打ち勝った者に与えられると約束されている。

黙示録は**冠の書**である――ここに、王の王としてキリストが冠をつけておられ、また、世に勝った人々がおのおの冠を与えられて主と共に地上を治めていることを知ることができる。

黙示録は**戦いの書**である――あらゆる時代を通じて激しい戦いのあることは、すでに創世記三・一五に示されている。それが最後の段階にきて、キリストと反キリストとが、一方は神の力を代表し、一方はサタンの力を代表して争うことが記されている。

黙示録は**勝利の書**である――キリストはひとたびは地上の裁判官、支配者の前に立たれた。しかしここでは、あらゆる支配者の上に正しい裁判を行なわれる力をもって来られるのである（黙一九・一一―一六、マタ二六・六三、六四）。柔和な人はひとたびは侮られ、しいたげられたが、今は地をついだ。小さな群れは世界の土台が置かれる前からその群れのために用意されたみ国を受けるのである。

「この世の国は、

われらの主とそのキリストとの国となった。

主は世々限りなく支配なさるであろう」（黙一一・一五）

黙示録は**あがないの書**である――ほふられた小羊は神のご計画の中心であり、造られたものすべての礼拝の対象である。（黙五章参照）そのほふられた小羊は、地上のあがないを記している神

の巻物を開くために、それを受け取った。ほふられた小羊の血によって聖徒たちはあがなわれ、その血で衣を洗い、その血で聖徒たちは、兄弟を非難する者に勝利するのである。

黙示録の内容

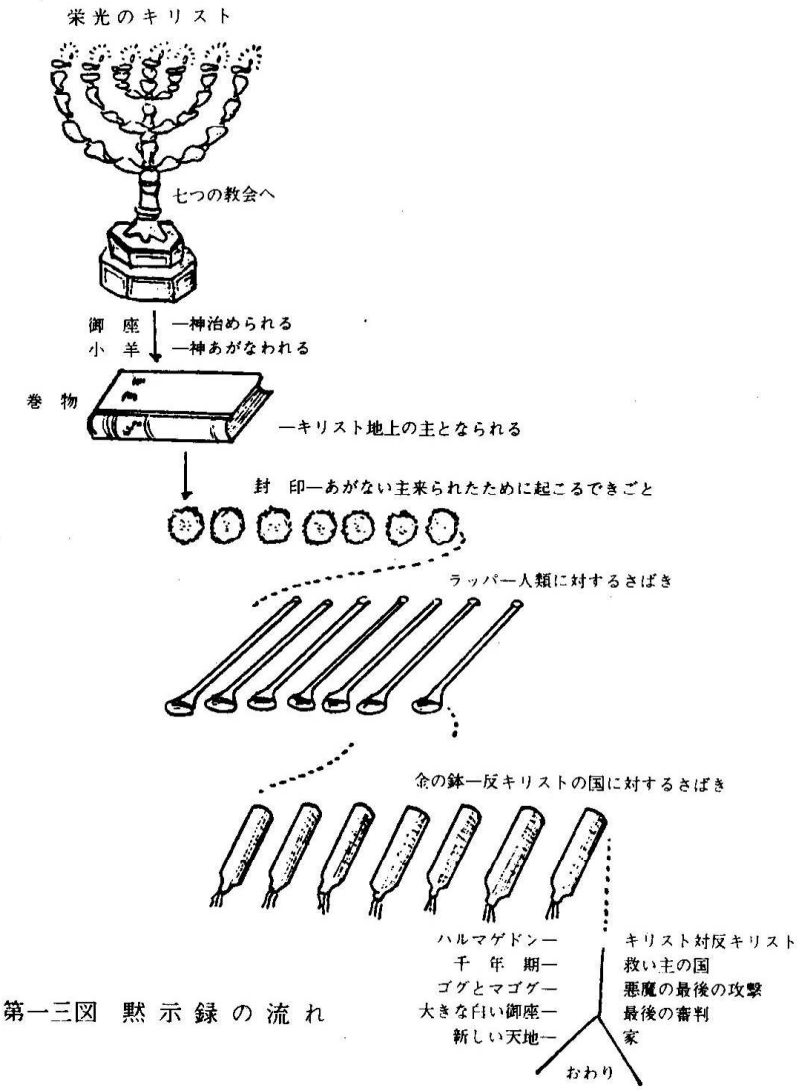
黙示録はむずかしい書巻である。そこで、ここでは直接その中心に関係のない部分は省いて、全体を大きく見渡してみよう。そのために第一三図を入れておく。

キリスト現われたもう（第一章）

除幕式で、銅像を包む布が取り去られ、その銅像が初めてその本当の姿を公けにされるように、この黙示（ギリシヤ語では「おおいを取り除く」という意味）の書で、キリストは、栄光を受けたもの、大祭司、王の王、さばき主、生きた者の主、死んだ者の主、という真実のみ姿を現わされたのである。

キリストとキリストの教会（第二章、第三章）

教会の大監督キリストは「世の光」として定められた教会を一めぐり調べて歩かれた。キリストは各教会の中を歩きながら、あるいはほめ、あるいは叱り、また慰めて、恵み豊かな約束を与



第一三図　黙示録の流れ

えられた。それは丁度苦難の黒雲が集まり、教会は危機に臨んでその備えをしなければならない時であったので、キリストは特に積極的に働かれた。国々の審判が近づいたのであるが、審判はまず神の家、教会から始められなければならなかったのである。

天　で（第四章、第五章）

わたしたちはヨハネと共に天の物見台に携え上げられる。そうして、そこから、イエスが下られる前に地上に行なわれるいろいろの有様を見ることになる。そこには神のみ座がある。それは神が最高の力をもって支配されたことを示し、どのような人間の反抗反対があろうとも、神はそのみ国をこの地上に作られたということを教えている。そこにはほふられた小羊が見える。それは、イエスを表わしているものであるが、あがないの働きをなされたのでイエスは地上救済の巻物を開くにふさわしいということがわかる。イエスはすべてのすべてに勝利するメシヤであり、その巻物の封印を切ることのできる唯一の方であられる。イエスはその封印を切り、その巻物のうちにひそむ力を実際に働かせ、主の勝利の再臨とメシヤのみ国の出現に先立って起こるすべての事を実現にいたらせるのである。

危急の時代（第六章から第一九章まで）

黙示録の第六章をマタイによる福音書第二四章四節から三〇節にまたがる部分と比較してみると、巻物の封印が解かれて黙示録に記されていることは、キリストの来られる前に起こる出来事に相当すると考えられる。第七の封印が解かれた時、七つのラッパが神のみ使たちに与えられる（黙八・一、二）。それは国々に対するきびしく強い審判を意味する。そうして、第七のラッパから七つの鉢が出てくる。七つの鉢はこれ以上はないという辛い苦難を示すもので、反キリストの国に注がれるきびしい審判を表わしているのである。

封印、ラッパ、鉢などは、いわゆる大患難（だいかんなん）時代を象徴的に説明するものである。大患難時代とはどのようなものであろうか？　今これを三つの面から眺めてみよう。

大患難時代の審判は地上に残った神の人々を清める神の火、同時にまた、神の敵を打ち滅ぼす神の火とも考えることができる。

また、この時代を「サタンのペンテコスト」と言ってもよいと思う。反キリストというのは肉体をもつサタンであるが、それはひとたび死んで生き返り（黙一三・三）、高くあげられ（黙一三・四）、彼の来ることと支配することとがすべての国々に、彼の代行者であるにせ預言者によって宣言される（黙一三・一一―一七）。サタンはまたしるしを行なう（黙一三・一三）。それから、サタンはすべての人々の上にその悪霊を注ぐ（黙一六・一三、一四、一六）。これは反キリスト宣伝運動である。このようにしてサタンはその霊を注いで、サタンに従う者たちを集め、一個の軍隊を

組織し、神と神の万軍に敵対しようとするのである（黙一三・四―六）。

S・D・ゴードン氏は、この大患難時代の出来事を、すべてを吹き払うあらしにたとえている。場所を隔てて温度の非常に違った空気があると、それがぶつかったとき、あらしが起こる。それと同様に、この終わりの日にキリストの力とサタンの力とがぶつかり合うならば、そこには必然的に、霊の世界にも物質の世界にも、ものすごくも恐ろしい大混乱が起こるのである。

あらしのあと（第二〇章）

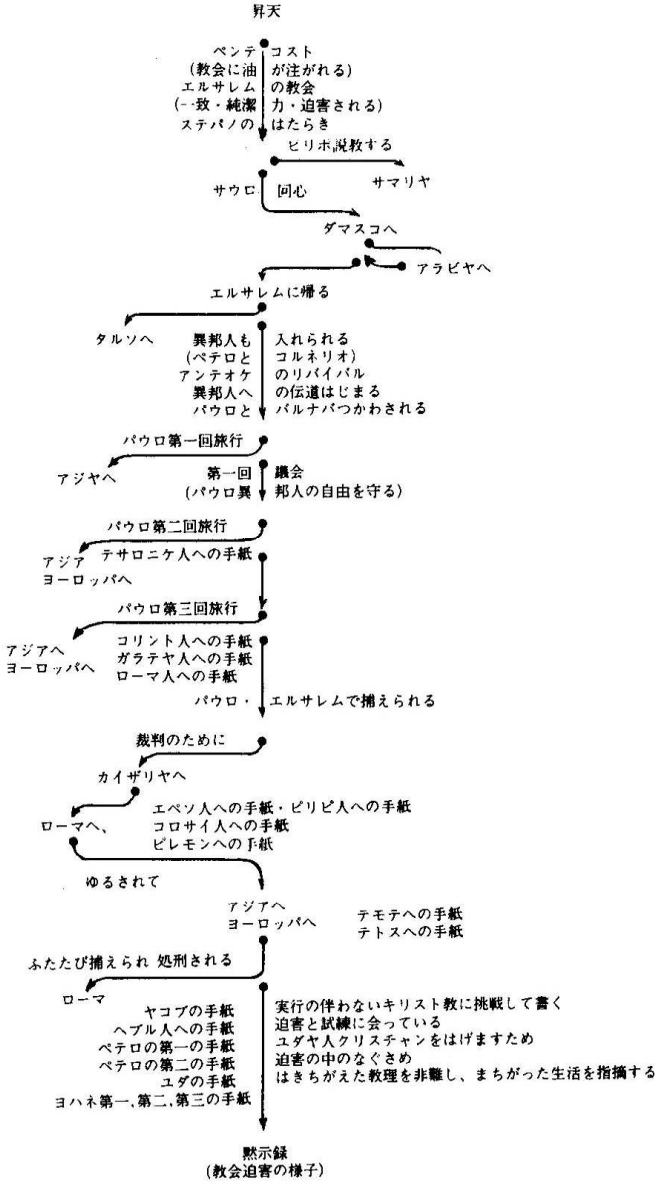
あらしのあとには静かな平和な快晴が来る。千年王国の時代を告げる義の太陽が、その水平線から昇る。むかしから預言者たちによって預言されてきた神のみ国がこの地上に来る。ダビデの子である大王が世を治め、完全な審判が行なわれる。人々は不自由もなく、その平和を妨げるものもなく、また誘惑の手を伸ばしてくる悪魔もない（悪魔は縛られている）という理想的な環境のうちに住む。しかし、そのような時代は一千年で終わる。そして、再びサタンは解き放たれ、悪の力はその最後の攻撃を試みるが、結局、サタンは打ち破られるのである。そして、大きな白いみ座が作られ、すべての者はそのしわざに応じてさばかれる。悪はこの地上からぬぐい去られ、人はめいめいその行くところへ行く。そこに、わたくしたちは新しい天と新しい地とを見るのである。

家（第二一章、第二二章）

聖書の行き着く先は一つの家である。幾千年をさ迷い続けた後、人は大いなる父の家にたどりついてくつろぎ、神と全く隔てない交わりのうちにはいる。神は母のような愛をもって、人の涙をことごとくふき取られる。わたくしたちは小羊イエスの花嫁として永遠に滅びることのない家に迎えられる。それは限りなく光り輝く新しいエルサレムである。天にあるものも地にあるものも一緒に集められて一つの家族となり、こうして神の大きな御計画を完成する一致をなしとげる（エペ一・九、一〇、三・一四、一五、コリⅠ一五・二四―二八）。この時、神はすべてのすべてとなられるのである。

この神の御計画の完成はまだ未来のことである。今はただ心に描いてみることができるにすぎない。しかし、その未来に身をおいて考えてみるならば、それは充分に身近なものとして実感することができる。その時、今は不可能と見えるその完成を、すでに完成したものとしてながめるようになるだろう。そうして、その完成の日には、神の知恵をほめたたえる歌を歌い、喜びにあふれる声を張り上げて、

「すべてが終った」と叫ぶことができるようになるのである。



第一四図　新約聖書の流れ――使徒行伝から黙示録まで

自習案内

第一章

一、この本はどのような研究態度で書かれているか説明せよ。(「はじめに」参照)

二、聖書は一通りざっと読んだだけで、その統一調和をつかむことができるか？

三、聖書は幾巻の書物から成っているか？　その著者は幾人か？　幾年間に書かれたか？

四、聖書を繰り返して注意深く読むと、どのようなことがわかるか？

五、聖書はほかの宗教の聖典といわれるものとは違っている。たとえばマホメット教のコーランと比べて、どのような点が違っているか？

六、聖書のうちの一つの主題は沢山の主題と関連している。図を描いて示せ。

七、聖書の中心問題となっている物語を簡単に記せ。

八、この物語はどのように頭にも訴え、心にも満足を与えるか？

九、聖書を書いた人はこれを霊感によって書いたのであるが、その一人一人は、神の御計画の

全体を知り、理解していたであろうか？

一〇、聖書中の人物は、その時代時代、神の作られた劇のある部分を演じていたことを知っていたであろうか？

一一、キリストは聖書各書巻を通じての中心であることを図で示せ。

一二、旧約聖書と新約聖書はどのように違うか？

一三、旧約聖書と新約聖書を結びつけるものは何か？

一四、旧約聖書は新約聖書に対して、どのような関係をもっているか？　その要点を簡単にはっきりと比較対照せよ。更にこの関係を図に示せ。

一五、パウロの説教によって、新約は書かれる前には旧約のうちに含まれていたということを説明せよ。

一六、旧約聖書は過ぎ去ったという意味はどのようなものか？

一七、旧約聖書の真理の香が全世界のものとなったのはいつか？

一八、旧約、新約両聖書を比べて、どのようにして旧約が新約によって完成されたかを説明せよ。

一九、キリストはどのようにして旧約を新約へと押し進められたか、図で示せ。

第二章

一、創世記を三部に分け、その大要を記せ。

二、創世記を図解し、神の御計画が一歩一歩なしとげられていった有様を記せ。

第三章

一、創世記の終わりはどのように記されているか？

二、イスラエルの民はエジプトの奴隷となっていた。その苦しみが将来イスラエルをある任務につかせるためにどのように働いたか？

三、主がイスラエルを選ばれた理由と目的とを記せ。

四、主は、なぜある一つの国を選ばれた国として分離されたか？

五、シナイの山で与えられた律法を三つの部分に分けて説明せよ。

六、預言者は主のイスラエルに対する関係を何にたとえたか？

七、律法はあがないの計画のどの部分を果たしているか？

八、主は常に「家」におられたということをイスラエル人に知らせるために、主は何を整えられたか？

九、イスラエルの政体はどのようなものであったか？　それについて、幕屋をどのように説明したらよいか？

一〇、幕屋の目的は何か？　幕屋は主の性格、意志、目的をどのように表わしているのか？　その三要点を記せ。

一一、幕屋は救いの計画について、どのような初歩的意味をもっていたか？

一二、幕屋（後には神殿）は、なぜ消えていったか？

一三、あがないのご計画を図解せよ。

一四、旧約聖書のどこに「神のみ前での礼法」が書いてあるのか？

一五、イスラエルは荒野でつまずいた。このつまずきが神の御計画を妨げたか？

一六、エジプトから約束の地まで、イスラエルの歩んだ道を図示せよ。

一七、第三章全体の要約を記せ。

第四章

一、ヨシュア記からエステル記までの時代をどのように二つに分けられるか？　その各々の性質を記せ。

二、カナンの地で、イスラエルはどのように孤立させられていたか？

三、神はイスラエルを他民族から分け離すために更に二通りの方法を用いられた。それを説明せよ。

四、イスラエルの捕囚、離散はどのような目的を果たしたか？

五、バビロンから帰ったイスラエルの民はどのような「病気」を清められていたか？

六、その時、イスラエルは神に対してどのような新しい真理を学びとったか？

七、他国民との交際により、どのような真理をイスラエルの民は自分のものとしたか？　それは全く新しい真理であったか？

八、バビロンから帰った時、イスラエルの政治に対する考え方はどのようになっていたか？

九、異邦人の力に圧迫を感じたイスラエルはどのようになったか？

一〇、預言者の預言がやんだとき、イスラエルはどのようにして自らを励ましたか？

一一、会堂の始まりについて記せ。

一二、人々を異邦人から分け離しておこうとして、エズラはどのようなことをしたか？

一三、預言者の預言のやんだ後、霊的指導者となったのはどのような人か？

一四、第四章全体を要約せよ。

第五章

一、旧約聖書の歴史書、詩書、預言書の関係を説明せよ。
二、第五章を「イスラエル人の心情」と名づけた。その理由を記せ。
三、ヨブ記はどのような問題を中心として書かれているか？
四、ヨブ記は、なぜ書かれたか？
五、旧約聖書の信者はどのような讃美歌を用いていたか？
六、詩篇を読むとき、そこに三つの「集会」を見ることができる。その名を記せ。
七、箴言の目的を記せ。
八、伝道の書にはどのような体験が書いてあるか？
九、伝道の書のメッセージはどのようなものか？
一〇、雅歌はどのようなことを教えているか？

第六章

一、預言者は未来のことばかり説いていたか？
二、預言者の役目と祭司の役目とを比較せよ。
三、預言者の見た事とそのメッセージについて図を描き、説明せよ。
四、あるユダヤ教の学者たちは救世主は二人あるとしていたが、どのようにしてそう考えたか？
五、預言者の働きで、生きた神の信仰は窒息を免れた。これを図示して説明せよ。
六、預言者の名を記し、各預言書の大要を示せ。

第七章

一、「トンネル」時代の、神のユダヤ人に対する関係を説明している旧約の書物はどの書物か？
二、「トンネル」を抜けるまでの間、ユダヤ人にはどのような光が与えられていたか？
三、イスラエルを故国に回復させるために、神はどのように扱ったか？
四、ペルシャ人はイスラエル人をどのように扱ったか？
五、律法学者の仕事について記せ。
六、ペルシャ時代の年代を記せ。
七、ギリシヤ時代の年代を記せ。

八、ギリシヤ帝国の建設者はだれか？
九、ギリシヤ帝国の建設者はユダヤ人をどのように扱ったか？
一〇、この時代に聖書はどのようになったか？
一一、この時代にユダヤ人を脅かしていた危険について記せ。
一二、この危険と戦うために立ち上がったのはだれか？
一三、彼らは他に何に対し反対をしたか？
一四、アンチオカス・エピファネスの迫害について説明せよ。
一五、この迫害は恵みとなったか、のろいとなったか？
一六、独立解放の戦争とその指導者について記せ。
一七、その救出の後、ユダヤ人は祭を設けてこれを祝った。どのような祭か？
一八、迫害と独立の年代を記せ。
一九、マカベヤ族の統治の年代を記せ。
二〇、マカベヤ族の統治について説明せよ。
二一、ローマの侵入の原因は何か？

第八章

一、あがないについて、聖書を五つの部分に分けよ。
二、キリストの来られる前に世界はどのような備えをしていたか？　五つに分けて考えよ。
三、キリスト教の始められたばかりの時には新約聖書はなかった。イエスの真理はどのような人によって確実なものとされたか？
四、マルコ、ルカ、この二人は使徒であったか？
五、福音書は、なぜ四つあるのか？
六、マタイは、どのような人に向けて福音書を書いたか？　そのメッセージの伝えるところは何か？
七、マルコ、ルカ、ヨハネによる福音書についても、一つ一つ同じように記せ。
八、最初の三つの福音書はどのようなものと言えるか？　また、それはなぜか？
九、ヨハネによる福音書はどのようなものと言えるか？
一〇、イエスの一生を簡単に記せ。

第九章

一、使徒行伝に記されている事はどのような事か？

二、使徒行伝の要点を三つに分けて考えよ。
三、使徒行伝には中心人物が二人いる。その二人はだれか？
四、使徒行伝のテーマを表わすかぎの言葉を記せ。
五、使徒行伝の構想を知るための図を描け。
六、教会の成り立ちについて物語を記せ。
七、移り変わりの時代についての物語を記せ。
八、使徒パウロの働きについて記せ。

第一〇章

一、手紙と福音書との関連を示す図を描け。
二、手紙と福音書との関係を説明せよ。

第一一章

一、黙示録は創世記で始められた神の真理の円をどのように完成するものであるか、それについて記せ。
二、黙示録が書かれた時の教会にはどのような事が起こっていたか？
三、黙示録のメッセージはどのようなことか？
四、黙示録の性質について記せ。
五、黙示録の思想の流れを図解せよ。
六、黙示録を区分して簡単に説明せよ。

展望台から見る聖書　終わり

展望台から見る聖書

定　価（本体874円＋税）

1959年（昭34）１月10日　初版発行
1970年（昭45）２月１日　再版発行
1977年（昭52）６月20日　三版発行
1981年（昭56）８月１日　四版発行
1988年（昭63）２月10日　五版発行
1996年（平８）３月20日　六版発行
2009年（平21）10月５日　七版発行

著　　者　マイヤー・パールマン
発 行 者　日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
発 行 所　日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
〒170-0003　東京都豊島区駒込３－１５－２０
電　話（０３）３９１８－５９３５
ＦＡＸ（０３）３９１８－０４７４
印 刷 所　ベーテルフォト印刷株式会社

ISBN978-4-938767-07-5

Seeing the Story of the Bible

by

Myer Pearlman

Copyright 1930 by

Gospel Publishing House
Springfield, Missouri, U.S.A.